慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国歴史学派に於ける方法論の発達
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.5 (1932. 5) ,p.749(53)- 816(120)
JaLC DOI	10.14991/001.19320501-0053
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320501-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國歷史學派に於ける方法論の發達

濱田恒一

一

近時屢々その頭上に浴せらるゝ冷罵にも拘らず、スミスよりケアンズに到る所謂正統學派なる一聯の經濟思想は、實にその時代に對して、赫々たる光輝と權威とを有せるものであつた。然も「自由貿易論」を抱懷する古典學派の理論は、その「世界主義」にも拘らず、寧ろ「國民的」であつた。それは英國産業の必然的な理論的産物であつた。世界市場に於ける獨占的支配を掌握せる英國は、如何なる競爭者に對しても、その勝利を確保する爲めの人爲的立法的手段をも必要としなかつた。從つて英國産業は何等かの關稅障壁を是認する爲めに、英國の特殊事情を持出す必要がなかつた。從つて當時の英國經濟學者達は彼等の注意を、英國資本主義の特異性に向ける必要を見なかつた

然るにドイツは英國に比すれば後進國であり、大體に於いて農業國であつた。新興のドイツ産業就中その重工業は、英國の競爭に依つて惱まされた。かくてドイツのブルジョアジーにとつてはドイツの發展の特性及獨立性に注意を拂ひ、その故に「保育關稅」の必要を理論的に立證する事が必要

であつた。かくて保護關稅運動を通じてドイツは歷史學派の搖籃となつた（註一）。

（註一）ブハーリン・金利生活者の經濟學、一八—一九頁

併し乍ら「自由主義」の衰微は、やがて英國をも訪れた。對佛戰爭に次ぐ一八一五年より一八三〇年に至る十五年間は非常なる社會的困難の時代であつた。貿易は不活潑であり、農業沈衰は遂に小農を破滅せしめた。失業問題は一段と激化した。英國歷史學派の微光はこの時に認められ得る。一八二一年ジョン・クレイグは Remarks on Political Economy を著はし、歷史の證左に訴へて、勞銀及利潤が反對に變化せざるべからずを做すのリカアドオ說に反對し、ジョン・ルックは一八二五年 Principles of National Wealth に於いて、リカアドオが一時的具體的の事物を看過せるを非難した。けれども、英國は產業革命の先進、有利なる貿易差額、勞働の低廉、緊縮政策、財產稅及所得稅の輕減、社會革命の防壓、インフレーション防止、戰後に於ける外國爲替相場の急速なる回復、等の有利なる諸條件によつて、この不況を切拔け、却つて遂には未曾有の繁榮時代に入らんとするに至つた。併し乍ら、他面に於いて政費の節約は失業を意味し、所得稅の廢止は、間接稅の增加に依つて貧窮階級を强く壓迫し、社會的秩序の維持は、勞働者に對する彈壓となつた。

一八三〇年より一八五〇年に至る二十年間は、永い一聯の改革時代であつた。改革は二方面より來つた。一は傳統的なる自由主義者のそれである。彼等の希求する理想はベンサム流の最大多數の最大幸福であり、そは自由放任によつてのみ得達し得られるものと考へられた。加之、この自由運動の背後には、宗教的動機があつた。自由放任派の信條に從へば、神は一定の國民に一定の能力を與へ給ふたものであるが故に、人爲の制規に依つて、財の交易又は各人の機會の利用を左右せんと試みるべきでない。葡萄酒を生產すべき氣候を佛蘭西に與へ、綿絲を生產すべき氣候を英蘭に與へたるは全能者の意思である。然るに關稅の障壁を設けて、人類の友愛と世界の平和を生むべき交易を阻げんとするは實に神意への背反であるといふ（註二）。かくて英國產業ブルジョアジーの意志は神の意思と考へられた。そは「全能者」となつた。

註二　L. C. A. Knowles-The Industrial and Commercial Revolution in Great Britain during the Nineteenth Century. 1922. p. 127.

ベンサム派の活動は、自由契約又は自由貿易の途上に横る幾多の法律の廢止となつた。植民の自由はその一であり、一八三四年に於ける救貧法の改正は顯著なる他の一例である。之に依つて、勞働能力ある勞働者は最早戶口救助を奪はれた。一八五〇年に於ける居住制限法の修正は、人と場所との最後の連帶を斷つた。かくして產業自由への法的障碍は除去された（註三）。

註三　Knowles-ibid p. 129.

かくの如き自由主義者に對立するものは、シャフツベリーを首班とするトーリー改革論者の一團であつた。彼等の活動は一八三三年に於ける最初の有效なる工場法であつた。之に依つて四人の監督官を設けた事は正に劃時代的である。最初は法律違反を防ぐ爲めの、一定產業への國家支配を意味したに過ぎなかつたが、漸時にその範圍を擴張して、遂に合衆王國に於ける全工場及全職場の、そして程度に差こそあれ、全產業の勞働狀態を規制した。然も、單に兒童のみならず、成年男女に

對しても之を行つた。シャフツベリー派の努力は一八三一年に於いて、機業、冶金及採鑛業に於ける實物賃銀制の禁止令を取得した。かくの如きは、英國民の深く愛惜する自由競爭と自由契約との理想の放棄であつた（註四）。

註四　Knowles-ibid. p. 126.

英國歷史派の著名なる先驅者リチャード・ジョーンズの An Essay on the Distribution of Wealth はこの同じ一八三一年に出版せられた。ミルの On the definition of Political Economy もこの年であつた。ジョン・レーの Statement of some New Principles on the Subjects of Political Economy は一八三四年であつた。此等の諸著はクレイグ、ルック、レー等のそれに比すれば、歷史的歸納的傾向の著しいものであつた。

一八五〇年より七三年までは好況時代であつた。この間に在つては、バジョットの Physics and Politics が、この好況時代の最後の年たる一八七二年に書かれてゐるに過ぎない。

一八七三年より一八八六年迄は非常なる不況であつた。鐵道及蒸汽船の爲めに小麥及肉類の輸入が容易となれる事に依る農業不況、ベッセマー法に依る製鐵工業の建直しに因る鐵鋼業の不況、蒸汽船と帆走船との競爭、スエズ運河及鐵道に依つてロンドン又はリヴァプールを通過する世界海運業の獨占が破られたる事等に由る海運業の不況、加ふるに新興ドイツの競爭は大英國の輸出入（海運業を除く）を次表の如くならしめた。

年平均	輸出	輸入
1870—1874	235 百萬磅	346 百萬磅
1875—1879	202	375
1880—1884	234	408
1885—1889	226	380

英國歷史學派はこの非常なる不況時代に於いて顯然その姿を現はした。イングラムの演說 The Presen Position and Prospects of Political Economy は一八七八年に爲された。クリッフ・レスリーの Essays in Political and Moral Phylosoph は一八七九年にバジョットの Economic Studies は一八八〇年にトインビーの The Industrial Revolution of the eighteenth century in England は一八八四年に出版された。

以上を總括するに、斯學派の重要なる文獻の殆んど全部が不況時代の產物である。唯一の例外たるバジョットの Physics and Politics さへ（本書は政治學書で經濟書ではない）好況の最後の年である。此の如き事實は舊き演繹的抽象的經濟學の實踐的無力を以て、歷史學派發生の一因なりとの推測を下さしむるに一應充分である。この點ドイツ歷史學派のそれと軌を同じうするけれども、初期の英國歷史學派は保護貿易論を主張しなかつた。彼等は依然たる自由貿易論者であつた。故に等しく經濟の實際に基因するとは云へ、英國歷史學派のそれはドイツ歷史學派のそれの如く、對外問題たるよりも寧ろ對內問題であつた。そして後述する如く、その中心は勞働問題であつた。

次に、思想的背景を一瞥すれば少くとも、ミルを通じて來れるコントの影響、ヘンリー・メインを中心とする法學の影響、ドイツ歴史學派の影響、カーライル、ラスキン等の人道主義經濟學の影響の四つを擧げる事が出來る。

狹義に於ける論理學の範圍内では、ミル自らの言ふ如く、コントが彼に與へたものは逆演繹法に過ぎなかつたであらう。併し、ものゝ考へ方といふ意味に於いてならば、ミルがコントに負ふ處は蓋し大なるものであると言はねばならぬ。先づ經濟學を以て社會科學の一分科と考へる事を學んだ。サン・シモンの秘書たりしコントが二十年の心血を注げる「實證哲學」は一八三九年から四〇年に亘つて出版された。彼は科學の分類に當つて、經濟現象を以て、他の社會的事實と交錯すること極めて大であつて、之に關して別個の科學を作る事は不可能であると認め、以て總括的社會科學即ち社會學を創設せんとした。經濟學は數學、星學、物理學、化學及生物學と竝んでその一部たるに過ぎないのであると。固よりミルは經濟學を不可能であるとは考へなかつた。「各種の社會的事實は、先づ直接には、各異種の原因に主として依存するものである。從つてそれ條の事實は、別々に研究される事が有利であるのみならず、亦さうあらねばならぬ。例へば社會現象の大いなる一種にして、富の願望を通じて作用する原因が、主として直接的原因たるものがある。これに主として關聯ある心理的法則は、少なる利得よりも大なる利得が好まれるとの周知の法則である――かくて經濟學なる名稱を受くる一科學が建設さるべきである」が、併し、社會現象の普遍的關聯は、その如何なる部分をも、他のものより獨立のものと稱するを得ないとのコントの見解は承認された。「社會活動の如何なる部分に發生する事柄でも、盡く社會現象の普遍的一致（コンセンサス）に依つて、必ず他の凡ゆる部分に影響を及ぼすものであり、又一の社會に於ける文明及社會的進歩の一般狀勢は、部分的現象に至大の勢力を有するものである」と（註五）。

註五　Mill. System of Logic p. 588.

又、ミルは社會の靜態と動態との兩者を取扱ふコント社會學に關する思想に打たれた。コントは「實證哲學」第四卷に於いて、社會學的方法を述ぶるに當り、社會靜學と社會動學とを區別した。前者は社會的共在の法則を取扱ふものであり、後者は社會的發達の法則を研究するものである。社會動學に對して適當なるは、比較の方法であつて、惟り歴史の助けに依つてのみ遂行され得るものである。社會的研究は人類力に在つて最良なるものゝ、現今に至る迄の普遍的發達の健全なる分析に基礎を有せねばならぬと（註六）。ミルも亦之に倣つて、經濟動學及經濟靜學なるものゝ區別を行つた。併しミルに於ける靜學及動學なる概念は、コントの如く、共在と發達との法則を意味せずして「平衡の理論と運動の理論とを意味するのである事を注意せねばならぬ。或は一八四四年四月三日附コント宛書簡に於いてミルは言ふ「余は生産の一般的法則と、分配及交換の原理とを分離せしむるに、特に力を入れるであらう。前者は總ての産業社會に必ず共通なものであるに對し、後者は必然に特定の社會狀態を前提とし、然もこの社會狀態が無限に繼續すべしとも、將又、繼續し得べしとも考へないものである」と。亦、イングラムへのコントの影響は後述する如く殊に大である。

註六　高橋誠一郎『經濟原論』序編、第五五六頁。

ヘンリー・メインの影響はバジョットの Physics and Politics に明らかなるべく、人道主義的色調はトインビーの裡に顯然たるべく、ドイツ歴史學派の影響に至りては、殊にレスリー及イングラムに認められる。

古典學派に於ける方法論的動搖は、リカアドオ一派に對するマルサスの言葉の中に見出される。マルサスは「經濟原論」の序に於いて次の如くに言ふ「經濟學に於いて、單獨化の願望は、特殊的結果の發生に、一個以上の多數の原因が作用する事を認める事を、好まない樣に至らしめた。若し一原因が、或一種の現象の相當な部分を説明するに足る場合には、直ちにその全部を之に歸し、かゝる解決を許さゞるべき諸事實には充分なる注意を拂はず、――又、この單純化し概括せんとする傾向は、何等かの命題に對して、修正制限及例外を許容するを好まざる風を生み、かくして「早急なる概括の傾向は二三の主要なる經濟學者に於いて、何等かの理論を事實に照合するを好まざる風を生ぜしめた」と。又言ふ「フイロソフイの第一任務は事實をあるがまゝに説明する事である」と。又言ふ「個々の事實を過重視する事に於いては、余は最も人後に立つ者である」と。かくて彼の「經濟原論」の「特有なる目的の一つは屢々事實に訴へ、又特殊的現象の發生に於いて起る一切の諸原因に就きて、可及的廣汎なる觀察を行ふ事に依りて、實地應用の爲めに、經濟學の一般原則を作らむとするに在る」（註七）。

註七　T. R. Ma'thus-Principles of Pol. Econ. 1820. Preface.

轉じてその「人口論」を見るに、時間的及地域的に廣汎なる範圍に渉つて、無數の事實が蒐集されたるをみる。この事實に照合するの傾向は、第二版以後益々顯著となつてゐる。けれどもその蒐集されたる事實は、依つて以て人口原理を抽出し來る可き素材としてゞなく、寧ろ却つて既に樹立されたる人に原理の説明乃至檢證たるに過ぎない。さればイングラムの言ふ如く「歴史的研究は總てマルザスの後思案である」（註八）けれども、然もこの事實的研究がリカアドオ的研究に、顯然たる對立をなせるは疑ひない。

註八　J. K. Ingram-History of Political Economy p. 114.

第十九世紀の進行と共に、英國資本主義は急速なる發達を遂げた。之に隨伴せる諸弊害の發生と累積、自由競爭に依る自由競爭の否定等は、古典的經濟理論の非現實性を增大し、一般化せしめた。

凡そ一代を風靡せる科學思想が根本的動搖に當面せる時は、方法論的論義が生ずるを常とする。之を守らんとする者も、覆さんとする者も、共に方法論の陣地に據つて、その力を致さんとする。ミル、ケアンズ、及びバジョットは守らんとする一團の人々であつた。

古典經濟學の方法論的防衛は、二つの傾向を取つた。その一は、科學の假説性を高唱する事に依つて、理論と現實との矛盾を回避せんとするものであり、その二は、古典的理論の歴史性を力説し、その理論の妥當の範圍を制限して之を推持せんとするのであつた。ミル及びケアンズは前者に屬し、バジョットは後者に屬した。

ミルに從へば社會現象は人類の共同的活動より生ずる現象であるが、人類の行動なるものは、種々なる動機より發すると共に、諸般の行動は錯綜し衝突し加重するが故に、よしやミルの行へる如

く、之を「富の生產の爲めにする人類の協同的活動」に限定するとしても、かゝる活動なるものを、況んやその法則なるものを指摘する事は、頗る困難にして不可能に庶幾い。玆に於いてかミルは「これ等の現象が、何等か他の目的の追求に依つて變更せられざる限り」との條件を設ける。この條件に依りて、經濟學は假設的科學となるのである(註九)。具體的に言へば、經濟學は人類を以て、專ら富の取得と消費に沒頭するものと看做すのであるが、人間の生活には、富の取得か主要なる目的となる部分と然らざる部分とがある。經濟學の對象たるは正に前者の部分がある。然もその場合、經濟學は主たる目的を、恰も唯一の目的たるかの如くに取扱ふ。この意味に於いて、經濟學は假說的科學たらざるを得ない。然もその假說たるや、全く事實に基礎を置かざることもあり得べく、又、普遍的に事實に一致する事を、主張することなきものである。從つて經濟學の結論は、幾何學の結論の如く抽象に於いてのみ眞たるに過ぎないのである(註一〇)。

註九　Mill-On the Definitions of Pol. Econ. 1831. (Early Essays. p. 135)

註一〇　Mill ibid, p. 133-137.

而して這個の演繹の基礎となるものは「人性」である。ホッブス、ロック、ヒューム、スミスその他の英國學者の傳統は、亦、ミルをして、總ての社會現象を以て、外界の諸事情が人間の集團に及ぼす活動に依つて生じたる、人性現象なりと觀ぜしめた。換言すれば、社會科學とは社會に於ける人間性の科學である(註一一)。但し、ミルはスミスの如く(註一二)或は又マルサスの如く(註一三)人性を以て恒久不變なるものとは觀なかつた。人性形成の過程を究明すべき Ethology の必要が力說せられた。併しその力說は單に力說に止つて、Ethology は遂に作られる事なくして終つた。從つてこの點に看取せられる歷史性は具體的成果を齎らす事なく、ミルに依つて經濟生活中に見出されたる人性は、昔ながらの自利心に過ぎなかつた。

註一一　Mill. System of Logic. Pt. VI.

註一二　Adam Smith.

註一三　T. R. Malthus—An Essay on the Principles of Population 1798. p. 11.

併し乍ら經濟學の有する歷史性の認識は、ミルに於いて相當に判然たるものがある。前に引用せるコント宛書簡に於いて、ミルは曰く「余は現在の經濟學に關する貴下の御意見を知悉してゐる。余はそれに就いて、貴下が有せらるゝよりは優れたる見解を有してゐる。余がその主題に就いて一書を著したにしても余は決してその（經濟學の）總ての具體的結論の純粹に一時的は性質を忘れるものでない」と(註一四)。こゝにミルが「經濟學の具體的結論の一時的性質」と言ふのは「現在の私有財產制が繼續する限り」といふ意味である。固より私有財產制の歷史性を認識したゞけでは經濟學の歷史性の認識としては、著るしく不充分である。等しく私有財產制の上に、建てられたる社會も、その發展の段階に於いて、種〻異なる內容を持つものであり、亦、同一たる發展徑路を辿る二社會に於いてもその發展の公式力に於いて樣々なる variation を示すものである。併し兎に角、私有財產制が資本主義的社會の根幹である以上、之が歷史性を認識し、延いて經濟學の歷史性の認識に到達せる事は、大いなる進步と言はなければならぬ。

註一四　一八四四年四月三日附書簡

然も前述せる認識の不充分は、依然たる演繹法の固執と經濟學の假說性の主張となつて現れてゐる。ミルはコントに依つて歷史的方法を（之をもミルは逆演繹法と呼ぶ）を敎へられたに拘らず、社會科學の研究を二種に分類する事に依つて、この歷史的方法を經濟學から驅逐した。即ち、社會科學研究には一定の社會狀態を決定する法則の研究換言すれば、一般社會學の研究と前提されたる一定の社會狀態の下に於ける一定の原因の作用の法則の研究即ち特殊的社會學の研究とが在るが、歷史的研究は單にこの中、前者にのみ適用せらるべきものであると主張されたのである。之に依つてみれば眼前の社會が歷史的產物である事は認められたけれども、眼前の社會の現象そのものが、歷史的發展の一過程として充分に認識されなかつた。かゝる事の結果として、經濟法則の「假說性」が、堂々と力强く主張された。そしてその假說性の度合に就ての考察が省略された。「法則」と「現實」との隔離は「妨碍原因」なる一語の中に壓縮されて了つた。この隔離の大いさが、例へば物理學に於けるより大なる事は認められたけれどもそれほ「方法」の誤謬に歸せられる事なく、全く無反省的に、對象の複雜性に歸せしめられた。が併し試みにこの「妨碍原因」なる語に包括さるべき諸事實を想起せよ、凡そ自由競爭を妨ぐる一切のものが入るのである。

同樣か見解は亦ケアンズに於いて見出される。

ケアンズに從へば、經濟學は富の現象の共在又は繼起の法則を解明する科學である（註一五）富の現象とは、結局、富の事實であり、生產、交換、價格等の事實、又は勞銀、利子、利潤、地代等の分配過程に於いて、富が採る種々な形式に過ぎない。而してその法則とは勿論それ等の公に存する自然法則である。換言すれば、諸現象間には恒常不變な因果關係が存し、これが經濟現象の裡に現れたものが、富の現象と稱せられる。されば經濟法則は現實の事實を表現するものでなく、一の「傾向」を表はすに過ぎないものである、然もこは物的科學に於いても同一であると（註一六）。

註一五　J. E. Cairnes. Essays. p. 253.

註一六　Cairnes-Essays. p. 225 及 Cairnes-Eharacter p. 26. p. 97

此の如く、經濟法則の性質と物的法則の性質とを漫然同一視する事、更に廣く言へば、經濟學と物理的科學とを、科學としては類似的のものと考へる事は、惟りケアンズのみでない。英國古典經濟學の大部分が左樣である。彼等はあるところのものを認識し、彼等の研究成果の普遍妥當性を求める故に一切の形而上學的要素を拒否し、彼等の學問を呼ぶに、科學の名を以てする。彼等の見解に從へば、精神科學（經濟學は之に屬する）と自然科學とは、同一の認識基礎、認識目的及び認識方法を有するものである。かくの如きは洵に、自然の認識に於いて眞價を認められたる方法を、そのまゝ社會的文化的、殊に經濟的現象に利用し得るものであり、且つさうなければならぬとする見解に他ならない（註一七）。ミルは「論理體系」第六編を以て、前五編の一種の補助であると云つた。何故ならば、道德的及び社會的科學に適用せらるべき研究方法は、若し科學一般の方法を論じたる前五編が、之に成功してゐるとするならば、當然既にその中に記述された事になるからであると（註一八）或は又、力學に於ける思惟方法を直ちに政治學に移し、「かくて政治學は演繹科學でなければ

ならぬ」（註一九）と斷定してゐる。ケアンズに至つて、一層端的に、天文學や物理學と經濟學とは、「その主題を異にするが、その方法、目的、及び結論の特性は兩者全く同一であると述べてゐる（註二〇）。

註一七　W. Sombart-Die drei Nationalökonomien. S. 121.

註一八　Mill-System of Logic. Longmans ed. p. 546.

註一九　Mill-Autobiography. 1873. p. 160.

註二〇　Cairnes-Essays. p. 253.

經濟學及經濟法則の論理的性質を、かくの如く認識する事は、次で述ぶべきその方法論と密接に關聯する。ケアンズは經濟學方法論への豫備段階として、自然研究に於ける方法の使用を攻究する。自然研究の歷史に依れば、その最初に於いて適用さるべき唯一の方法は歸納法であつた。之に依つて、少數の窮極原理が發見された。之に依つて演繹法使用の道が開け、幾多の中間原理のみならず、重力の法則の如きが發見された。かくの如く、自然科學者の研究の論理的性質は、その科學の發達につれて變化した（註二一）。

註二一　Cairnes-Character. p. 74.

這般の解釋から、ケアンズは「歸納法は窮極原因の發見に用ゐられる方法である」と結論する。茲に窮極原因とは、より上位の原理に依つて說明されない原理、それ自身がより上位の原理よりの結論たらざる原理といふ意味である。然るにこの概念が經濟學に齎らされる時、それは經濟學の前提といふ意味に變化する。そして「經濟學者は窮極的原因の知識から出發する」と考へられ、從つて歸納法は經濟學には無用であるとの重要な結論に到達してゐる。この結論の當否は本論文の直接關與せざる處である。寧ろ必要なる「窮極原因の分析である」ケアンズがかゝる窮極的原因として擧げるものは（イ）人間に於ける一定の精神的感情及び一定の動物的性向（ロ）生產の起る物的條件（ハ）政治制度（ニ）產業技術の狀態の四つである。勿論、前後の文意からみて、これ等四つは、單に例として示されたもので、之で盡くしてゐると考へてゐるものではない事は明である。この中（ニ）（ホ）は確に歷史的發達の成果たるものである。從つてこれを前提とする經濟學が、歷史的制約を蒙る事は、ケアンズに依つて認められてゐる筈である。併し明言すされて居らない。寧ろケアンズの力點は經濟學の演繹性と假說性に存したと見るべきは、通說の通りである。却つて、ミルの方が全體的に歷史的雰圍氣が遙に濃厚である。然も遂に經濟學の歷史性に關する判然たる把握及び敍述は、ワルターバジョットに殘された。

二

バジョットに關する敍述は、之を二つに分つて述べよう、その一はスミス、マルサス、リカアドオ等に對するバジョットの方法論的見解であり、その二は經濟學に關する彼自身の意見である。

國富論出版百年記念に際して、バジョットはスミスを評して曰く「アダムスミスは一錢の金を儲けた事もない一介の書子である。彼はかゝる事には總て不適當な人であり、殆んど信すべからざる程放心な人であつた。嘗て彼は彼に擧手の禮を行へる一步哨に對し、反身になつて同じく最も嚴かに擧手の例を返して之を喫驚せしめた。亦或公文書に署名するに際し、彼は實に丁寧に、前の署名者の

署名を寫書したのであつた。若しカーコーディの町民等をして、如何にして金を儲けるかを世に教ふるに最も適しからざる人を選ばしむるならば、恐らく彼等はスミスを選んだであらう。然るにその人の著作は、他の如何なる著者の著作よりも、金を作り又金の勞費を防ぐに至らしめた」と（註二二）この「一介の書子」が著せる「國富論は、假説的に單純化されたる擬制人を取扱はずして、生ぎ且つ動く現實人を取扱つた。その關與するものは、ギリシャ人ローマ人であり、中世の諸國民であり、スコットランド人であり、イングランド人であつて決して抽象的世界に逸出しなかつた。富裕の自然的進歩を人類文明の自然的發達の一部として考察し、スミスは常にそれが全體として、如何に人性に依つて影響されたかを考察した。（註二三）かゝる態度は、その書中に現るゝ多數の事實と共にスミスの所説をして著るしく現實的なるものと思はせるに至つた。バジョットの鋭利なる眼光は、この「現實」の煙幕の背後に、抽象的經濟學への道が、スミスに依つて拓かれたる事を見出さんとした。それはスミスに於ける「人性」なる概念の究明に依つてゞある。確にスミスは人性を單一なるものと看なかつた。「情操論」と「國富論」の所謂矛盾の問題が之を立證するのみならず、スミスは「人性の諸原理」（註二四）といふ言葉を使用してゐる。併し乍ら、かくの如きはスミスの學問體系全般を考慮する場合に然るのであつて、單に經濟學の領域内のみに於いては、左様でない。バジョットの言ふ如く「スミスの人性概念は非常に局限されてゐる」そしてこゝに彼と抽象經濟學との關聯を、バジョットは見出すのである。「道德情操論は多少異つた論調を示すがも國富論に於ては、その全篇を通じて、自己の金錢的利益を增進せんとする人間願望が、經驗の示す處よりは遙に普遍的に强烈であり、この利益の爲めに働かんとする意思が一層熾烈であり廣汎であるものとして、取扱れてゐる。勿論人類の注意深き觀察者たるスミスは、富の欲望以外に幾多の動機が、人間行動の原動力となる事を認めた。そしてその結果として、彼は今日、非經濟的現象と考へられるものをまで考慮した、それ故に彼は近代の經濟學者等よりも了解され易く、そして實踐的である樣に見える。併しこれは彼の分析が不完全な處から生ずるのであると。（註二五）筆者はバジョットのかゝる批評を喜ぶものである。實に國富論中に現れる多くの經濟理論は、自利心の前提なくんば理解し得られざると共に、他の動機なくしても充分理解し得られる底のものである。故に抽象經濟學への道が、スミスに依つて拓かれたとするバジョットの主張は肯定される。

註二二　Bagehot-The Centenary of the "Wealth of Nations. Warks and Life of Bagehot by Mrs. R. Barrington vol IX. p. 196.

註二三　Bagehot-Economic Studies p. 94.

註二四　A. Smith-Theory of Moral Sentiments 及び Wealth of Nations.

註二五　Bagehot-Economic Studies p. 96.

このスミスに依つて拓かれたる道を歩むで、遂に眞正なる抽象經濟學を建設せる者は何人であるか。バジョットに依るも、そはデヴィッド・リカアドオであるがその前にトーマス・ロバート・マルサスが數へられなければならない。固よりマルサス自らは抽象經濟學を建設し、又は之に貢献せんとする意思を有したのではない。前述せる如く、却つて彼はリカアドオ等の抽象的傾向を警めてさへゐ

る。されば人口理論の取扱ひに當つても、彼は古代社會から文明社會に至るまでの多數の事實との關聯に於いて、之を爲してゐる。即ち彼は總ての國民と總ての時代とを論じつゝあるものであると考へてゐた。彼は全く現實社會を論じつゝあるものと考へてゐた。然るに「偶然にも、彼の現實社會なる概念は、現實社會から引出され得べき、最も便利な抽象と一致したのである」（註二六）孰れにせよ、マルサスが設定せんとせるは、人口の自然的法則であつて、その歴史的法則ではない。自然的法則はそれが演繹的に構成されたると歸納的に構成されたるとを問はず、容易に演繹經濟學に利用され得る。

註二六　Bagehet-Econmic Studies P. 139

然も抽象經濟學の直の創始者はリカアドオである（註二七）彼は一定の基本的假說から出發した。そしてこれから進んで、單なる演繹に依つて、彼の總ての結論を展開した。彼は殆んど全く現實世界に觸れなかつた。そして彼の概念以外には何處にも在存じない假說的世界を作つた。從つて彼の見解は廣汎なるよりも、寧ろ深刻であつた。少しを良く說明したが、多くを看過した。現象を修正する總ての原理の包括的總合よりも、むしろ到達するに困難なる少許の眞理を與へた（註二八）それにも拘らず、リカアドオ自らはバジョットの解釋に依れば、之を氣付かなかつたのである。彼は彼が實は擬制的事情に於ける擬制人性を考察しつゝある時、現實的事情に於ける現實的人性を考察しつゝあるものと考へたと（註二九）この解釋は單純には肯定も否定もされ得ない、少くとも、今日、人がリカアドオに就いて考ふる如き程度には、リカアドオ自身は抽象的と考へなかつたには違ひない、それは肯定され得る。併しリカアドオが自ら現實を取扱ひつゝあるものと考へてゐたかどうかは、しかく明白ではないのみならず「現實的」といふ語義に依つても種々に言ひ得らるゝであらう。

註二七　Bagehot-Economic Studies p. 151.

註二八　Bagehots works. vol. VIII. p. 190.

註二九　Bagehot-Economic Studies. p. 157.

更に筆者はジョン・ミルに對するバジョットの方法的意見を聞かん事を欲する。「經濟學研究」の編者ハットンは、不幸にして之は充分には聞かれないと述べてゐるが（註三〇）バジョットは一八四八年即ちミルの「原論」出版の年に於いて The Prospective Review 誌上に之が評論を掲げてゐる

註三〇　Bagehot-Ecoromic Studies. p. 160.

「ミル氏はその著の序に於いて、純粋な經濟理論の理論的表明と、之を吾等が生き且つ動く現實世界に正しく過用する爲めに最も必要なる外附的考察とを、その著作に於いて、結合せんと欲する事を述べてゐる。これは氏のいふ處によれば、經濟學が一定の假說の上に立てるが故である、これに依つて經濟學は修正を加ふる事なしには、人類の現實的狀態には適用し難い結論に導かれる事があるからである。かくて人間は常に、その欲望する物を、可及的低廉に購買せんとするものである事が、終始假說される。けれども實際には、虛榮、自由及び懶惰が絶えず之を阻げつゝあるのである。かゝる例外的理由の存在は經濟學を二分せしむる。常識的思想家ともいふ可き人々は、これ等の影響と非常を重要視する例へばアダム・スミスはその一例である。彼は認められた事實から簡單な

歸納を行ひ、之を適用するに非常に卓れてゐた。反對にリカアドオは富の哲學に關する抽象的思想家中の最要なる人である。實にミルはこの二傾向の融和を企圖した譯である。而してこの大事業を彼は實に巧に成就した。抽象的科學の主たる適用は、こゝに在つては、充分なる事實の知識と一般的原理の把握とを以て行はれた。この兩者の融合に對して余は之に比すべきものを見ないと、（註三一）

註三一　Bagehot-Works. Vol. VIII. p. 189-191.

ジョン・エリオット・ケアンズに就いては、その人の死後數日にして、追悼文をバジョットは草してゐるが、それに於ては、單にケアンズの類稀れなる抽象的頭腦とその功績を稱揚するにとゞまつてゐる。（註三二）

註三二　Bagehot-Works. Vol. VI. p. 243.

以上を總括するにバジョットは所謂正統學派を以て、抽象的演繹的なりと解してゐる、通常、具體的歸納的傾向が大であると考へられてゐるスミス及びマルサスに就いてさへその演繹的抽象的側面を强調してゐる。然るにバジョット自身は歷史的發展的思想の所有者である。彼の採るべき態度は、率直にその先人等の業蹟を非難するか、然らずんば、彼等の學說の裡に歷史性を見出すかでなければならぬ。彼は實に後者を選むだのである。

バジョットに從ふも、經濟學は抽象的假說的科學である。曰く「完全なる形式に於ける經濟學は抽象的科學である。從つてそれは非現實的假想的主題を取扱ふ」（註三三）とその非現實的主題の中心を爲すものは「經濟人」である。經濟學は現實に於いて吾人が知つてゐる樣な、現實人を取扱はない。この科學の抽象人はたゞ富の所有の願望しか與へられてゐない。固より、かくの如き人間が實在するが故に非ずして、かくする事が、この願望の力の結果を、他の總てのそれから引離すに便利だからである。これに依つて、この產業的願望中の最大なるものゝ作用が判然するからである。かゝる假說よりの出發は經濟學に於いて正等のある、凡そ科學の格率は「先づ單純な場合」からである。主要なる力が、可及的阻害されざる時、如何に作用するかを觀る事から始める。これを徹底的に理解したる後次いで、妨碍的諸要素各個の個別的影響を之に加へるのである。自然科學に於いても之は必要である、況んや一層多樣にして認識困難なる諸力を論ずる「社會の科學」に於いては正當である（註三四）自然科學の法則が取得される方法と、經濟のそれとは同一である。自然法則の發見は殺人犯の發見に等しい。後者の場合には嫌疑者を捉捕し前者の場合には疑はしき原因を孤立せしめるのである（註三五）かゝる假說的出發の結果として、經濟學は當然の「傾向」の學とならざるを得ない。即ち、一定の重要なる力の結果をば、恰もこの力のみが作用し而して他の何ものも全く之に影響しないかの如くにして、究明し確定する。併し實際に於いては他の多くの力が影響を及ぼすが故に、孤立的に取扱はれた力の結果は、決してその通りには現れない。換言すれば、這個の結果は、妨碍的原因の發生が少なるに從つて、その現れる事が人となるのであると（註三六）、

註三三　Bagehot-Economic Studis p. 74.

註三四　Begahot-Economic Studies p. 75.

註三五　Bagehot-Economic Studies. p. 12-13.

註三六　B.gehot-Economic Studies. p. 76.

かゝる限りに於いて、バジョットの意見は舊抽象的經濟學者のそれに全く符合する。更に進んで「その假說にして眞なる限り、その演繹は論爭し得べからざるものであり、その結論は精確に眞である」（註三七）と稱するに至つては、事實の檢證を重要視したるミルの如きよりは、一層抽象的であると云ひ得るであらう。

註三七　Bagehot-Economic Studies. p. 78.

かくの如き立場より二種の現實的方法が排擊される。その一は單件的方法（Single-case Method）である。それは一國の事實、例へば一八六六年の恐慌とか或はロンバード街の歷史といふ樣なものを、孤立的に分析する方法である。勿論之は非常に結構な事であり。又非常に重要な事ではあるが、之を以て原理の代用とする事は出來ない。それは恰も系を以て、その系の依存する定理に代へむとする如きものである。一恐慌の歷史は多數原因の混合衝突の歷史である。若し各個の原因が、如何なる種類の結果を生ずべきかを知らない限り、そこに發生するものゝ如何なる部分をも說明する事が出來ない。それは蒸氣の理論を知らずして、ボイラーの爆發を說明せんと試むるに等しいものであると（註三八）その二は全件的又は列擧的方法（All-case or Enumerative Method）である。これは研究せんとする對象の徹底的な事實的調査から出發せんとする方法である。こゝにはグスダフ・コーンの主張が引用される。「絕對的眞理と完全なる智識とに到達する方法はたゞ一つしかない。即ち、その事件の事實の徹底的調査である。こゝに事實といふは、所謂實務家の日々の事務上に現れる如き事實のみならず、完全なる歷史的統計的研究が發見すべき事實をも云ふのである。若しかくの如き仕事が完成されるものとしたならば、ドイツの經濟學者等はドイツ銀行業の諸原理を再び手に入れた事を誇り得るであらう。併し、銀行業一般のそれは未だしである。銀行業一般の原理を設定せんが爲めには、同樣英蘭蘇蘭、佛蘭西、亞米利加等の即ち銀行業の存在する凡ゆる國の銀行業の事業を把握する事が必要であらう、コーンは曰く「The safe groma of hope for Political Economy is following Bacon's exhartation to recommence afresh whole work of Economic Incuiry」。

註三八　Bagehot-Economic Studies. p. 15.

併し乍ら。ベーコンの方法はジェヴンズが指摘せる如く、「洵に實際的效果の薄弱なものであつた。例へば熱の本質を知る爲めに、ベーコンが列擧した實例は百個を超えてゐる。然も尙不完全である。若し之が完全を期せんか顯在表、如表、比較表、排除表等に揭げらるべき實例は無數とならねばならぬ（註三九）結極それは不可能である。コーンに對するバジョットの批評も之と同じく「コーン氏に依つて提案されたる全件的方法は不可能である」（註四〇）といふ

註三九　三田學會雜誌第廿四卷第四號拙稿「ベーコン新論理學解說」

註四〇　Bagehot-Economic Studies. p. 12.

抽象的演繹的方法の主張と現實的歸納的方法の排斥！　クリッフ・レスリーがバジョットは舊演繹學派に屬したと稱せるは（註四一）この意味に於いて正當である。併し乍ら「Fortnightly R·view」誌上に於ける最近の氏の論文は、舊學派の指導者等が從來彼等の方法と理論に對して要求せる基礎を放

乘する事に依つて、英國經濟學史上に、一時期を劃せるものである」（註四二）と言つた事も、等しく眞實である。レスリーの言葉は二つの內容を持つ。その一は從來の英國經濟學を以て、經濟生活の特定段階に對してのみ適用せらるゝ事を、即ちその歷史的制約を認識した事であり、その二は經濟學の假說性即ち經濟學は傾向の學なる事の力說である。けれども既に說きたる如く第二の點は決してバジョット特有の事ではない。ミルもケアンズも判然之を認識してゐる。たゞ實際に當つては、バジョットの言の如く、經濟學者自らが屢〻之を閑却せる事が認められるけれども、方法論としては、バジョットはミル・ケアンズ等の言を反復したに過ぎない。主要なるは第一の點である。稍〻詳細に之を論じてみよう。

註四一　Cliffe-Leslie-Essays. 2ed. p. 63.

註四二　Leslie-ibid. p. 63.

バジョットに依れば、英國經濟學は、外國に於いては、その當然の價値に於いて評價されてゐない。何故であるか。種々なる理由が數へ得られるが、その最も重要なものは、英國經濟學の特性そのものから發すると考へられる。それは英國經濟學が「實業の科學」（Science of business）たる事である。特に大なる生產的商業的社會に於ける實業の科學たるの一事である。換言すれば「大商業」社會の分析である。それはかゝる商業を可能ならしむる主要事實を假說し、抽象的科學の流義を以て之を孤立せしめ且つ單純化する。而して亦之が論ずる人間は這個の商業を實行し又之を可能ならしむるの人間であるそれは「實業」の事項を論じて、人間は實業の動機に依つてのみ發動せしめられるものと假說する。從來の諸學者と雖も、所謂經濟人が現實人に非ざる事は充分理解してゐたが、經濟學の取扱ふ世界が、頗る局限されたる特殊の世界なる事を屢〻理解しなかつた。彼等は彼等の敎ふる處が總ての社會狀態に平等に適用し得る如くに屢〻想像した。然るにそれは商業が大いに發達せる、而もそれが英蘭に於けると同樣、又は之に近い發展形式を採れる社會狀態にのみ眞なのであると、（註四三）英國經濟學の礎石的前提たる「富への願望」に就いて考へてみても、かゝる願望そのものは必ずしも大商業社會にのみ存在するものではないが、之が支配的力を有するは、大商業社會にのみ看る事實である。然るに英國を初め、世界の主なる國々は、現在、商業國民であり、その國民の大部は、主として實業に從事せるが故に、これ等の國民に關する限り「實業的動機」の無拘束的結果の單純な分析が彼等の生活の大部分に近接する事になる。（註四四）

註四三　Bagehot-Economic Studies. p. 6.

註四四　Bagehot-Economic Studies. p. 79.

この事は、反面に於いて、英國經濟學の結論を非經濟的段階に在る國民生活に適用する事の愚を示すものである。例へばローマの如く、奴隸制を基礎とする戰爭的國民東洋諸家の如き固定せる慣習に依つて束縛される國民野蠻狀態に在る種族等は、主として商業精神に依つて導かれはしない。貨殖なる要素は彼等の心裡に在つては、最も從屬的なものであり、その影響は、彼等の生活中に於いて頗る從屬的なものであると。（註四五）

註四五　Bagehot-Economic Studies. p. 80.

次いでバジョットは舊經濟學の基石たる「資本及勞働の移動」なる前提が、所謂大商業時代に於いてのみ存在する事を歷史的に立證せんとする。「經濟研究」第二十二頁から第七十一頁までが、この立證の爲めに當てられる。

彼の意見に從へば勞働が一の雇傭から他の雇傭へ移動し得る爲めには、少くとも四個の條件が豫め滿されてゐなければならぬ。その一は。その間に移動し得べき雇傭が存在する事であり、その二は社會狀態の固定に依つて支持されるの必要なき政府の存在であり、その三は該國民が不動の地方的軍隊に依賴する事なくして自國を防禦し得る事であり、その四は雇傭の數を制限する如く又は今日の自由勞働よりも完全に移動し得る如き、非自發的勞働の存在せざる事である。然るに之等の條件は大商業の歷史的段階に立てる國民に於いてゞなければ滿されない。反對にかゝる國民、例へば英國に於いては明かに勞働は雇傭から雇傭へと移轉してゐる。バジョットは數字を擧げて之を示してゐる。（註四六）

註四六　Bagehot-ibid. pp. 22-40.

資本の移動に就いては、永年金融界の人たりしバジョットの說明は遙に詳細である。極くそれを要約するならば、資本移動の第一前提條件は、移動し得られる勞働の存在である。第二はかゝる資本が、これを移動せんと欲する人の自由になるものでなければならぬ。第三にはかゝる資本が諸業務に集中してゐなければならぬ、それでなければ業務から業務へ移轉出來ない。第四には利潤を計算し得る爲めに貨幣がなければならぬ。第五には貨（貸付資金投機資金及新資本家の業務）の手段がなければならぬ。第六には移轉を確保する政治的狀態の存在である。バジョットはその敍述の裡にかゝる諸條件が大商業國以前の發展段階に於いては見出されざる事並びに「かゝる資本の自由移轉及び之より結果する利潤の平等への强き傾向が、競爭の增加と資本の發達につれて日々眞實となりつゝある理想であり、一切の障碍が漸次に減少しつゝあることを示したのである。（註四七）

註四八　Bagehot-ibid. pp. 41-71.

かくて舊經濟學の歷史性は判然と示されたのである。そしてこれに依つて「吾が英國經濟學の基礎を定めんとする目的」（註四七）敵達成せられたのである。

註四八　Bageh t-ibid. p. 71.

イングラムはバジョットを以て、歷史的方法と演繹的方法とに、各別個の研究領域を與へたものであり、後者は之を近代的な進步せる產業生活に限り前者に對しては一切の過去の經濟現象と人間の現在の他の方面の一切とを讓渡せるものであるといふ（註四九）「人間現在の他方面の一切」を「歷史的方法に讓渡せりや否やは、斷言の限りでないが、社會の發展の法則の研究に關する限りに於いては、確に之を歷史的方法に讓つてゐる Physics and Politics は明かに之を示すものである。そはヘンリー・メインの所說に從つて、社會的進化の過程をば「身分」より「契約」への推移として表明すると共に、かゝる推移の說明を主として「自然淘汰」と「遺傳」とに求めてゐる（註五〇）この點にダーヴィンの影響を認める事が出來る。そしてこれは彼自身の意識せる處である（註五一）併し乍ら、社會の發展過程に關する彼の思想を紹介する事は、當面の問題ではない。たゞ筆者はかくの如く社會の發展の

法則の研究を歷史的方法に委ね進步社會それ自身の經濟學的研究を演繹法に俟たんとする事は、結局一般社會學的研究と特殊的社會學研究とを分ち、歷史的方法を前者に演繹的方法を後者に分ち適用せんとするミルも方法論の大綱に歸着する事を言はんと欲するのである。

註四九　Ingram-History of Pol. Econ. 219.

註五〇　Bagehot-Physics and Politics 參照

註五一　Bagehots Works-Vol. VIII. p. 29.

三

英國歷史學派の最高峰クリッフ・レスリの業蹟は、經濟史及び學說史研究及び方法論研究の三つに大別し得る。

經濟史的研究は之を省き、先づ學說史的研究から論じよう。レスリーの意見に從へば、凡て思索と哲學說の進步を辿る事は歷史的研究の一補助部門である。然るにこの部門は經濟史の主體と最も密接なる關係を有してゐる。これ一時代に於ける思索の主題と形式とを決定する主要條件の一つが社會の實際狀態だからである（註五二）こゝにレスリーの言ふ「思索の主題と形式」なる言葉の中には、多くのものが含まれる。例へばロッシャーの言葉を引いて、現實法の凡ゆる制度は、之に適應する經濟制度をその背後に有すると云ひ、或は、宗教改革は惟り相當な物質的な經濟的變化を生じたるのみならず、實は一般的社會進化の成果であつて、その經濟的なる一側面は、新世界の發見と之に基く物價の大變動とに見出されるといひ、ルーテルの人口增加に對する熱狂は、その時代の經濟的觀念と神學及び物質的狀態との關聯を說明する、何故ならば、それは一方に於いては僧院的獨身生活に對する反抗から、他方に於いては、生活資料の急增から生じたものだからであるといふ（註五三）レスリーが當面の問題たる經濟學說も、亦當然その裡に包含される。元來、經濟學說は少くとも三つの觀點から考察され得る。その一はその思想の原因に關聯してゐる。その二は、その眞理性に就いてゐあり、その三は輿論及び政策の形成要素としてあるが、レスリーの主として注目する處が第一の點なるは言ふまでもない。即ち特定の社會的、政治的、物的思索條件の產物として、之を考察し、之と這個の諸條件との關聯を探索するのである

註五二　Leslie-Essays in moral and Political philosophy p. 84.

註五三　Leslie-ibid. p. 85. 86.

かくの如く、思想を歷史的產物と觀る事と、及び之を歷史的に探究せんとする方法とは之をヘンリー・メインに受けたのである。レスリー自ら記して曰く「著者は Middle Temple に於いて、サー・ヘンリー・メインの講義に出席するの幸運を有し、初めてそこに歷史的方法を學んだ」と、（註五四）

註五四　Leslie-ibid. P. X. note.

メインはその「古代法」の序に於いて、その書の主たる目的を示し、そは人類の最古の思想の或ものを、それ等が古代法の中に反映せる限りに於いて指示し而してそれ等の觀念が近代思想への關聯を指摘する事であると言ふ（註五五）それが爲めに行へる方法はインド、ギリシヤ、ローマ等種々なる社會に於ける社會事情と法制と法的思想との歷史的相關的研究であつた。そして進步的諸社會の運

動は身分より契約への運動である事を見出した（註五六）而して「過去の諸時代と現代とのかゝる相違の認識は現時の最も有名なる思索の本質中に侵入してゐる、道德的研究中、今日相當の進歩をなせる唯一の部門たる經濟學は、若し命令法がその嘗て占有したる領域の大部分を放棄し以て人をして自由に自ら行爲の準則を決定せしめたる事が眞でなかつたとしたならば、生活の事實と一致し得ないであらう。經濟學を學べる人の大多數は、彼等の科學の基礎を爲す一般的眞理を以て普遍的となるの資格あるものと看做す癖がある」と（註五七）

註五五　H. S. Maine-Ancient Law 1861. Preface. p. V.

註五六　H. S. Maine-ibid. p. 170.

註五七　H. S. Maine-ibid. p. 305.

レスリーはこのメインの方法を經濟問題の檢索に用ゐ、現在の經濟機構及び社會狀態を永い進化の成果と看た。その經濟學史的研究も、かゝる立場の一つの現れである。從つてその學說史論の重點は賃銀利潤等の個々の現象に關する學說の究明よりも、一學說の一般的傾向とその學說を生じた る環境との關聯如何に置かれてある。然もこの環境の裡には學者自身の個人的經歷が含まれる。「洵に經濟學史を通じて、特定の著者の閲歷・教育・性格は、その發展と形式とに、少なからざる影響を有する」ものと考へられる（註五八）これ等の點よりして、レスリーの學說史研究は個々の學者を中心とする、個別的研究の傾向が强い。その反面に於いて、學說より學說への發展過程は、比較的看過されてゐる。筆者も之を念頭に置いて筆を把るものである。

註五八　Leslie-ibid. p. 144.

最初に論ぜらるべき者が、アダム・スミスなるべきは當然の事であらう。スミスの把れる方法が演繹歸納の各れに屬するやの古き問題は、最早今日は問題にならない。明かにスミスは兩者を併用してゐる。攻究すべきは、全體としてスミス經濟學の如何なる點に、二方法が各自用ゐられてゐるかである。その演繹的傾向の中、最も顯著なるものは「自然」なる形而上學的前提である。それは直接的には自利心となつて經濟行爲を嚮導する。所謂「見えざる手」の導きと、その有利なる成果の可能とを信ずることは決して歸納的思想ではない、然もこれあるの故を以て、スミス經濟學の全てが演繹的構成物なりとは主張し難い。

レスリーは寧ろスミスの實證的歸納的歷史的傾向をより强調してゐる。曰く「スミス」が自ら提出せる問題は決して、自然の先驗的秩序は如何といふ幻想的なものゝみではない。彼は進んで事物の實際的秩序、即ち富裕の實際的進歩とその原因は何であつたかを研究した。彼は書かれた證左からする書齋の歸納に甘んぜずして、英佛兩國に於いて、彼の眼に映じたる總ての現象を注意深い觀察を以て比較した、約言すれば、彼は歸納的研究の爲めに、人類の經驗に加ふるに彼自らの經驗を以てした」と（註五九）

註五九　C. Leslie-ibid. p. 33.

レスリーの學說史研究の目的を最も判然と示せるは、その「米國經濟學」なる一論文である。その說に從へば、アメリカ經濟學は主として歐洲からの輸入物で、獨創的發展をしたものではない。併

し、それにも拘らず、アメリカ經濟學に特徴なしと論ずるは誤りである。少くともそれは四個の特徴を有する。その一はマルサス人口論の否定乃至輕視である。この事は北米大陸の莫大なる富源、未耕作の廣大なる沃土、劣等地よりも寧ろ優等地への耕作擴張發明に依る生産費低下急速なる人に増加の現實的必要移民の生活狀態の急速なる改善等に依つて充分説明され得る。第二の特徴は神學的要素の混入である。是が原因は主なるアメリカ植民地の宗教的起源とアメリカ思想に及ぼせる神學教義の傳統的影響である。そしてアメリカに在つては、政治哲學研究は神學者の手に委ねられたのである。第三の特徴は英國經濟學にみる如き、競爭が一國全體の勞銀及利潤を平均化せしむとの假説からの長い演繹推理の缺如である。これが一原因はアメリカ産業の過程に於ける急速なる發明と變化である。何故ならば産業的技術の靜止的狀態に於いてのみ、貨物の價値はその原費に依存し得るからである。別の一原因は投機その他から生ずる物價の變動及び原費からの離脱それである。第四の特徴は大學教科書に於いて、保護主義を以て、一の科學理論として教示する事これである。これはアメリカに於ける政治的及物質的狀態に基くものである。その主なるものは勞銀高に依る生産費の高い事であると。又殊に興味深きは米國經濟學の祖とも稱すべきヘンリー・ケヤールズ・ケリーの學説の分析である。ウィリアム・エルダーの言葉を引いて、彼はアメリカ人であり愛國者であつて英國の自由貿易制及び英國經濟學への熱情的嫌惡は、その國民的偏見に何程か與つてゐる。彼の父はアイルランドの愛國者にしてその生國から政治的追放を受けたのである。何等かの遺傳的なものがその息子の生涯と性格を通じて、多くの昔ながらの血潮と共に存するのが見出されようと述べてゐる。かゝる個人的環境以外に地理的理由を求めて、ケリーの學説は國民經濟學たるよりも、寧ろペンシルヴァニア經濟學である。それは鐵や石炭と同じくペンシルヴァニアの産物であると（註六〇）

註六〇　Leslie-ibid. p. 146.

這般の學説史的研究乃至批判の基調をなせる思想は、抽象的演繹的經濟學一般への批判の裡に一層判然と看取される。そは常に歷史主義の立場より爲されたる批判であり、從つて又、歷史主義の高唱に外ならない。

レスリーの解する處に依れば、先驗的演繹的抽象經濟學は、既に述べたる如く經濟學を以て普遍的眞理又は自然的法則の一體とみる。その演繹的方法は正にかゝる經濟學概念と不可分に結合する。彼等は一二の根本的假説を樹立し、これよりして演繹的に結論するその根本的假説として彼等が選べるものは「富の願望」と「勞働忌避」である。特に積極的役目を演ずるものは前者である。レスリーの第一の不滿はこの點に始る。

凡そ經濟學は社會學の一部門である。勿論それは特種の社會現象を特殊研究の爲めに撰擇するけれども、併しこの目的の爲めには、それ等の特種社會現象を支配する一切の力と法則とが研究されなければならない。孤立的方法は決して哲學に於いて許されないのではない。人智の力には際りがある以上、經濟現象をば特定の研究の對象とする事は誤りではない。併しそれが正當なものである爲めには這個の現象に影響する他の總ての原因が考慮の裡に入れられなければならない。所謂演繹的經濟學者はこの點を誤解してゐる。彼等は單に孤立のみを行つて諸他原因の作用を考慮に入れな

いのである。（註六一）

註六一　Leslie-ibid. p. 212.

洵に凡ゆる國民の全經濟は永い進化の成果である。所謂經濟發展の階段と稱せられるものは實は社會的進化に外ならない。その裡に在つては、歴史的に繼續してゆくものもあれば、亦變化するものもある。經濟的側面はかゝる社會的進化の一特殊面に過ぎない。それは道德的知的政治的側面と不可分に結合してゐる。それ等の側面は、社會的進化と共に變化し、それ等の側面の變化は社會の經濟的構成、その富の性質、數量、分配の中に現れるものである。從つて一國民の經濟を生じたる法則は、歴史と社會及社會的發展の一般的法則の裡に求められなければならない（註六二）　かくて小數原理よりの演繹に依る方法は當然排除されなければならない。

註六二　Leslie-ibid. p. 173.

かゝる方法理論的批判はしばらく別として、直接端的に演繹經濟學の內容に立入つてその重要なる二三の概念を檢討しよう。

演繹經濟學者の通說に從へば、富とは交換價値を有する一切のもの、或は、人間欲望の對象にして、供給が制限され交換に於いて價値ある一切のものを包含するといふのであるが、この概念はどうであるか。凡そ富には無數の種類があつて、その及ぼす經濟的效果は各〻非常に異つてゐる。例へば酒類と家屋とは共に富であるがその經濟的效果は異つてゐる。且つ富の種類は種々なる社會狀態に於いて非常に變化が起るものである。經濟史の最も重要な一要素は富の新しい種類の發展であつて、これが各國民の物質的並びに精神的狀態に深く影響する。帝政時代のローマの富と共和制時代のそれとは質に於いても量に於いても異つてゐる。然るに前述の如き富の概念は、これ等の變化や差違や。或は之を支配する社會及び社會的進化の法則の上に何等の光をも投じないのであると。（註六三）　かゝるレスリーの批難は、演繹經濟學者の富の定義に依つては、示され得ない一面があるといふ批難である。それは眞實である。併し足らざる一面の在る事は、必ずしも一の定義を否定するに充分なる論據とはならない、足らざる反面に於いて、確かにこの定義は、少くとも交換社會の富に共通なる一面を導破してゐる。レスリー自分の認めたる如く歴史的變遷の中には可變なるものと不變なるものとがある、這個の定義はその不變なるものを捉へてゐる、更に可變なるものをも捉へようといふのがレスリーの注文である。洵に困難なる要求である。レスリー自分も遂に富の定義は與へてゐない。若し定義の一要義として、簡潔が認められるならば、レスリーの言はんとする處は寧ろ之を定義の說明に於いて言ふに如かない。

（註六三）　Leslie-ibid. p. 163-166.

富の概念に次いで問題となるは「富の願望」なる一原理である。これは英國經濟學に在りては、スミス以來の世襲財產である。勿論スミスにもマルサスにも或はリカアドオにも、この言葉そのものはないが、之等の人々に依つて用ゐられた「自利」とか「自己の狀態を改善せんとする努力」とかいふ言葉は、之を經濟社會に於いて考へれば、結局「富への願望」と同一事に歸する。それ故にこれは正統學派全般に共通なる基本的概念といひ得る。レスリーは必ずしもかゝる願望の存在を否定しない

が、その意見に依れば、この言葉は非常に多樣なる欲望、願望、感情に對する一の總括的名稱である、而してそれ等の欲望や願望は各〻その經濟的影響と性質とを頗る異にし、歷史的には或點に於いては根本的に變化すると共に、又他の點に於いては歷史的持續性を有するものである。換言すれば富を對象とする諸願望は（之と拮抗する諸願望も）各國民の歷史的經過と文明狀態の產物である。否、進んで云へば、個人、階級、國民、性、社會狀態を異にすれば、一々異るものである。饑渴は「富の願望」の最初の形式である。家畜の願望は次の社會階段に於ける、その主要形式である。土地への願望は農業と共に發生したのである。この「富への願望」の一變形として「蓄積の愛後」があるが、之亦、種々なる社會狀態に於いて、頗る種々なる具體的形態を採る。分勞のない處ではそれは土地、家畜、家屋寶石等、蓄積者自身又はその家族の現在欲望又は豫想欲望に依つて決定された形を採るが、吾等が住んでゐる商業的社會では他の消費者の欲望と需要又は蓄積者自身の願望・豫見・諸關係に依つて決定される（註六四）演繹經濟學がかゝる歷史的具體性を抽象し去る事にレスリーの不滿は存する。レスリーの意見は巧妙であるが彼の望む結論は樹立されない。「富の願望」とは「一般的購買力の願望」即ち「生活の必要品及便宜品一般に對する支配增加の願望」であるが、レスリーの所說では、人がその日常の經濟的行爲に於いて這個の願望に支配され、その結果、より少なる利得よりも、より大なる利益を撰むとの假說の不合理又は無用なるを立證し得ない生活必要需品及便宜品なるものに關する人の觀念に多大の變化があるといふ事では、問題の要點を衝いてゐない、富の願望の遠い目的は多樣でもその直接的效果は等しいからである。人は非利己的な目的の爲めにも、一般購買力を欲するであらう。併しその故に、自己の勤務又は貨物を、その市場價格以下に賣りはしない。人間の欲望對象が頗る多樣なる事を認めても、尙、それ等が交換され得るものであり、且つ價値に於いて同一單位なる限り、それ等は富の一定量と看做され得るのである（註六五）

註六四　Leslie-ibid. p. 169.

註六五　Keynes-Scope and Method of Pol. Econ. p. 122.

「富」「富への願望」及「蓄積の愛好」は生產の問題、殊に富の大いさを支配する條件と密接に關聯する。然るに抽象經濟學が之に就いて敎ふる處は、頗る斷片的である。それは次の如き數個の命題及び理論の形に於いてのみ存在する。

一、富への願望の影響下に於いては、人の精力と努力は絕えずその取得に向けられる。

二、富の大いさは、分勞に依つて大いに增大する。

三、生產の三要素中、勞働と資本の供給は增加するが、土地のそれは停止的である。然るにその土地の生產性は人口增加と共に減少する傾向がある。

四、富は生產的消費又は支出に依つて增加し、不生產的消費又は支出に依つて減少する。等。

此等の中第一の命題は富の性質並びに數量に對して殆んど光明を投じない、富への願望は必ずしも勤勞を生ぜしめる事にはならない。況んや節欲にはならない。第四の命題に就いても、不生產的消費は必ずしも富を減少せしめる傾向あるものではない。寧ろ、不生產的消費は一切の生產に對する窮極的誘因であると。これは少しく過言である、人は先づ生きんが爲めに生產する。そして例へば勞働

者を充分な勞働狀態に維持せんが爲めの消費を、人は不生產的消費とは云はない（Keynes Scopeand Method of Pol-Econ. p. 107）又レスリーは曰ふ、加之、支出が富の大いさに及ぼす影響はその支出の採る方向に依存する。即ち、勤務及耐久性なき貨物に向ふか耐久的な貨物に向ふかに依存する。凡そ「富の願望」及「消費と支出」の影響に關する主要問題はこれ等が、種々なる社會狀態に於いて、又、種々なる制度その他の環境の下に於いて、如何なる種類の富と、如何なる取得樣式と如何なる實際的使用とを生ぜしめるかであり、又それ等が前述の諸點に於いて如何なる社會的進化の法則に從ふかである。繼續的社會段階に於ける富の取得手段の如きは、明かに社會進化の秩序ある法則に從ふものである。道德的政治的原因が經濟的原因に協力する處なくんば、奴隷制度は、尙、今日の英國にも存在したであらう。狩獵時代、遊牧時代、農業時代と續く進化は、サー・ヘンリーメインの言葉を藉りて云へば「地位より契約への運動」と密接に結合してゐる。かくの如きは社會進步の道德的、知的、法的、政治的及び經濟的各側面等の不可分なる性質を能く立證する。個人的權利なるもの無く、各人の法的地位は血液、出生及び性に依つて決定される原始社會に對しては、之に相應する政體、即ち粗雜は種族組織が存在する。而して亦そこには、個人的所有を特定種類の個人的使用品に限定し、何等の土地所有權を認めず、性と年齡をば分勞の唯一の基礎とし而して何等個人間の交換を導かざる經濟制度が存在する。道德的狀態も知的狀態も全く同一である。個人的責任觀は皆無であり、精神的個性を獨創力もなく、無人は同じく思惟し同じく行爲する。然るに抽象經濟學は、かゝる經濟生活と他の生活との關聯並びに經濟生活自身の歷史的變遷を全く語らない。（註六六）

註六六　Leslie-ibid. p. 177.

分配論に關しても、レスリーは依然不滿である。リカアドオの價値、價格、勞銀、及び利潤說の根本は「初期の段階に於ける社會に於いては貨物の交換價値は、殆んど專ら各個に投下されたる勞働量の比較に依存する」との假說である。併しレスリーの主張に依れば、このリカアドオの三段論の小前提は、野蠻民族に於いては、物は之を生產するに必要な勞働量に比例して交換される事が自然的であるとの假說である。その大前提は、原始的社會狀態に於いて自然なる事は、最も進步せる社會狀態に於いても自然でなければならぬといふ事である。この小前提は先決問題要求の嘘僞を包含し且つ事實とは全く相違する前提である。何故ならば野蠻人の交換は不規則的で從つて何等勞働と犧牲の尺度を持たぬ。狩獵の獲物は多く偶然的に決定される。起るべき交換は異る地方の特產物の交換で、而も個人間ではなく團體間に行はれる。たとへ個人間に行はれたとするも、それは兩當事者の必要の緊迫に依つて支配される。之に反し大前提は、二個の社會狀態が全く別個なるが故に媒概念不周延の嘘僞を包含する。リカアドオ說をして、リカアドオ自らが與へたよりは有利なる形式を採らしめんとする場合彼は議論は次の如くなる。即ち停滯的な小社會――その中に於いては、職業は極く小數且つ單純であり、各人はその總ての隣人の事情に精通し、彼等が幾千を如何にして作りたるを知り、そして人は自己の職業よりも有利なる如何なる職業へでも轉じ得る――に於いては、貨物の價値及個々人の利得は勞働と犧牲に依存する、それ故に、大商業國民に於いても、勞銀、利潤、價格及び生產利得の分配は、同一原理に依りて、即ち生產者の負擔せる勞働と犧牲に依りて決定さ

れると考へられる。抽象經濟學の第一基本假説としてバジョットが示せるものは、これである。

併し乍ら這個の假説は原始社會並びに大商業社會の兩著に關して共に等しく誤つてゐる。何故ならば前者に於いては規則的勞働も、利得の計算も、亦、個人間の交換も存在しないからであり、後者に於いては、無數の職業の各々が不斷の注意を必要とし、交換は無數であり、之〻影響する諸條件は永續的變動を蒙るが故である。洵にリカアドオは原始社會の等質性と進歩社會の多質性の兩者を無視しバジョットは進歩社會の無限的多質性を無視してゐる。近代的商業社會に於いて、一貨物の價格に影響する諸原因の複雜さを考へて又、品物の製造販賣に依りて得らるべき相對的利潤を秤量する事の可能性を考へてみよといふ、こゝでレスリーは The Study of Sociology に於けるスペンサーの言葉を引いて一商品綿花の價格決定に對し、如何に多數の原因が作用するか、從つて之が推定の困難なる事を示してゐる。

抽象經濟學の主張する利潤均等化の説も不滿である。之を承認せんが爲めには、實業人は凡ゆる貨物に關して前述スペンサーの説ける如き詳細なる推定を行ひ得るものであり、かくて異る企業の相對的利潤を秤量し得る事を認めなければならない。この假説を支持すべき唯一の證明は、勞働及資本が比較的有利ならざる事が知られてゐる用途を去つて、よりよき收益を生ずる事が知られてゐる用途へ行くといふ事である。併しこの命題さへも、決して普遍的に眞ではない。若し眞ならば歐洲よりアメリカへの移民は夙に兩者の勞銀を均等化してゐる筈である。ミルは利潤均等化の説を述ぶるに當つて、個々の利潤が個人的關係の偶然事その他の偶然に依存する事を認めてゐる。バジョットも亦一國の資本が貸付資本家に依つて、最も欲望されてゐる處へ運ばれる。併し若し人々が市場の狀況に精通し得るものとすれば Messrs. Overend and Gurney & Messrs. Collie and Co. の破産等が惹起する譯がない。（註六七）

註六七　Leslie-ibid. p. 184.

輓近に至つて、演繹經濟學の適用範圍を頗る制限し、之に依つて先驗的演繹的方法を保持せんとする説が現れた。バジョットの説く處はこれである。彼等の説く處によれば、近代の英國に於いては、リカアドオの分配學説が宜く適合する樣な分配を成立せしむる抵の商業的利益の追求並びにそれより生ずる職業撰擇が存在するといふ。その當否は別として、兎に角かゝる制限を附する事に依つて演繹的自然法則に基ける普遍的科學たるの要求を放棄した事になると、洵にこれに依つてバジョットは本來の正統學派と區別される。それは明かに歴史的經濟學の思想の一片を而も決して少ならざる一片を示せるものと言ひ得る。併し乍らレスリーの評する如く、英國に看る如き經濟社會は社會的進化の成果であり、その凡ゆる側面に於いて、傳統慣習、法律、政治制度、宗教及道德的感情の影響を表はせるものである。換言すれば、その裡に在つては、國家、家旅及び教會でさへもが直接間接に有力なる要素であり、從つてその裡に於ける個人の、各種の富の性質と價値諸職業の制度等は歴史を離れては説明し難いのである（註六八）固よりレスリーの如く歴史的方法を重要視するの可否は別としても、經濟學の歴史的相對性を認め乍ら、歴史的方法を閑却せるは歴史主義の甚だしき不徹底を示せるものと言はねば乍らぬ。その不徹底は演繹經濟學殊にリカアドオ流のそれを維持せんと

する處に發してゐる。この意味に於いて、バジョットを舊演繹經濟學に屬するものとせる（註六九）レスリーの意見は失當といふを得ない。

註六八　Leslie-ibid. p. 179.

註六九　Leslie-ibid. p. 63.

Essay in Political and Moral Philosophy に蒐錄されたる諸論文中、方法論上最も重要なる On the philosophical Method of Political Economy の末尾に於いて、レスリーはその所說を要約して「この論文に於ける表明は不適當ではあるが、それは一方に於いて、抽象的先驗的方法が富の性質、數量及び分配の各れを決定する法則に就いても、何等說明を與へない事を示し、他方に於いて、哲學的方法は歷史的でなければならない事、そして國民史の經濟的方面と他の諸方面との關係を索ねなければならない事を示すものとして述べられたる……今日の英國社會の經濟狀態は、その政治制度、家族制度、宗教形式、藝術及科學、農業、工業、商業の狀態を發展せしめたる全運動の成果である。經濟學の哲學的方法は這般の發展を說明するものでなければならない」といふ（註七〇）

註七〇　Leslie-ibid. p. 190.

レスリーが英國經濟學に於ける何人よりも歷史的方法の意義を能く把握し、且つ著作が斷片的なるに拘らず、能く之を表現したる事は確實である、この意味に於いて筆者は彼を英國歷史學派の最高峰と呼ぶのである。

同じく歷史派の一人ジン・ケルズ・イングラムはレスリーを頗る高る評價してレスリーの論文は經濟學の論理的方面に關するものとしては、ミルの未定問題以後の最要なるものである。この問題に就いてクニースその他の獨逸學者の書いたものに通じてゐる人々はレスリーの取扱方の新鮮と獨創とを理解するであらう」と稱した。（註七一）

註七一　J. K. Ingram-History of Pol. Econ. p. 222.

最後に數學的方法に關するレスリーの見解を述べて、レスリー論を終らう。當面の對象はスタンリー・ジェヴォンズの「經濟學原理」であり、特にレスリーが論ずるはジェヴォンズの經濟學概念とその方法とである。ジェヴォンズは經濟學を以て、個人的利益に依つて支配される行爲に關する既知の事實公論又は假說即ち「萬人はより大なる明白な利益を選む」とか「人間の欲望は多少速に充足される」とか或は「勞働は長引けば益〻苦痛となる」といふが如き事から演繹される理論に限定する。從つて例へば人口理論の如きは除外される。かくの如き經濟學概念がレスリーのそれと衝突するは殆んど自明の事であるが、他方に於いて、ジェヴォンズは社會の經濟現象及びその法則を確知する爲めには歷史的歸納が必要である事を充分認めた。曰く「經濟學は效用の條件に就いての充分にして精確なる研究を基礎としなければならない。そして此の要素を理解する爲めには、人間の願望と欲望とを檢べなければならない」と。たゞ不幸にしてジェヴォンズは這般の現實的研究をば「經濟的社會學」なる名の下に、一般社會學の一部門として、經濟學から分離せしめてゐる。從つて結極、レスリー自らの認むる如く、この點に於ける彼とジェヴォンズの差は、分類と命名の問題に歸して了ふ、併し「分類と命名」に於いて兩者を異らしめたる根本的傾向は、兩者の經濟學の全貌を隔絕せめたのである。

一層重要なるは方法の問題である、ジェヴォンズの數學的方法は既にケアンズに依りて否定された。ケアンズは Character and Logical Method of Political Economy 第二版の序文に於いて言ふ「本書が初めて出來た時には、尙、數學的方法といふものに就いては、殆んど聞く處がなかつた、之に關する當時の余の意見は、經濟學がその前提を得來る源泉を考ふる時、斯學は到底數學的取扱を容れ得ないものであるといふのであつた。その後友人ジェヴォンズ教授の「經濟學原理」が出版された。余の能力の許す限り、ジェヴォンズ教授の議論を熟慮したが、數學に暗い余に出來る限りの範圍内に於いては、余は尙舊說を固持する。余は他の方法に依りて得たる經濟論を表明せんが爲めに、幾何學的圖形又は數學式を用ゐうべきを否定しようとは思はない。余が敢て否定せんとするは、かゝる手段に依りて、經濟學的知識が擴張され得るとのジェヴォンズその他の主張する學說である。人の感情が精密な數量的形式中に表現せられ得る事が示されない限り、或は又、經濟現象が感情に依存しないといふ事が示されない限り、余は余の結論を如何にして廻避すべきかを知らない。ジェヴォンズ氏は曰く「經濟學の諸法則は量を論じ量の關係を論ずるが故に、大部分數學的たらねばならぬと」と。若し余にして誤らずんば、ジェヴォンズ氏の立場を支持する爲めには、これ以上に何物かゞ必要である」と（註七二）かゝる意見は「數學」的表現といふ事と算數的表現といふ事との無意識混同に基くものといへよう、經濟學の原理が物的世界の要素及び力の如くに計量し得られざるを述べたる後「故にそれ等は算術的又は數學的表現をされ得ない」（註七三）と述べてゐる事は這個の混同を曝露せるものといへよう。

註七二　J. E. Cairnes-ibid. p. vi-vii.

註七三　Cairnes-ibid. p. 109.

レスリーは此の問題を「かの狹少な領域（ジェヴォンズの概念する如き經濟學）内に於いて、果して吾等はジェヴォンズ氏の言ふ如く單なる演繹のみ得るのであるか」との疑問の形に於いて提出する、之に對しレスリーは例へば外國爲替の變動の如く恐らくは數學的に取扱ひ得べきものゝ在る事を認容するも、然し大體に於いて之を否定する、吾等の經濟的活動の全部が利益と不利益の量の比數に依存するとのジェヴォンズの意見を否定する必要はない。併しジェヴォンズ自身が道德に言及せる事は「經濟學は量を取扱ふが故にのみ數學的ならざるべからず」といふ命題、及び「取扱はれる事物が大小を云々し得べきものなる時、常にその法則と關樣とは數學的ならざるべからず」といふ命題と矛盾する。更に取扱ふ事物が大小を云々し得るからと云つて、直ちにそれを數學的に測定し得る事にはならない。例へば貨物の供給量、之に對する類望の急迫の度合、及び之が購買常望者の手中に存する資金の大いさを與へられたとしても、その價格は尙ほ決定し難いと（註七四）かくの如き所言はレスリーも亦數學的取扱といふ事と、精確なる計量といふ事とを混合せるものと斷定するに充分である。

註七四　Leslie-ibid. 71.

併し乍ら、數學的方法の使用は經濟學認識に於ける「一の根本的變化を意味する。それは本質認識を放棄して關係認識に移る事を意味する。然もこの事はジェヴォンズ自身に依つてさへ「關係」といふ事が屢、言はれてゐるに拘らず、判然と意識される事が無かつた。吾等はこの點に關してはパレトー

を待たねばならなかつた。

四

ジョン・ケルズ・イングラムは一八七八年「經濟學の現狀及その將來」なる演說に依つて、世界の經濟學者の著るしい注目を惹いた。イングラムは先づ當時の英國に於ける經濟學の狀態から說き起して、經濟學が公衆の心裡に在つて沈衰せるを承認した。僅々四半世紀前に在つては經濟學は一般の信賴を博し少くともその重要なる學說に關する限り、その終局に近づきつゝあるものと想像された。然るに一八七八年に於いては、それは賃銀取得階級及びその代辨者の意見と對立し、更に學者全般の疑惑に遭遇した。イングラムはかゝる經濟學の不滿足なる狀態を說明し之に對する救濟の道を發見せんとした。その師コントに從つて、彼はこの不滿足なる狀態の原因を、經濟學と諸他社會科學との分離に見出し、從つてその救濟は經濟學を社會學の一部として取扱ふ事の裡に在るものと信じた。而もその社會學は進化的社會學でなければならなかつた。社會發展一段階は他の段階に連續し、各段階に適應する諸學說はその生活の反映でなければならない。經濟學は余りにも絕對的であつた。英國に於けるその指導者達が設定せる諸學說は、彼等自身及びその亞流に依つて總ての時と所に適用し得られるものであると看做された。一般に承認されたる見解に從へば、自由貿易は正當にして、之と相對立する保護主義は誤謬であつた。然るに、彼の見解に從へばその各れの價値も單純に決定される事は出來ない眞正なる政策は特定國の特定的發展階段との關聯に於いて構成されるべきであつた。

かゝる見解の必然的系として彼は經濟學の余りに抽象的演繹的性質を誤謬なりと主張した。彼は演繹法の使用を非難しなかつたけれども、然も經濟界を理解する爲めにはリチャード・ジョーンズが言つた如くせねばならないと主張した、吾等は過去及現在の事實を研究せねばならぬ。吾等は演繹的たるよりも、寧ろ主として歸納的でなければならないと。（註七五）

註七五　R. T. Ely's Preface to History of Pol. Econ. by J. K. Ingram. P. IX.

かくてイングラムは所謂「新經濟學派」の特徵を次の如く要約する。

一、一般科學體系中に於ける經濟學の地位に關しては、新學派は富の研究が、一時的假定的を除けば、他の社會現象から孤立せしめられてはならない事を主張する。又、人間生活の各方面の關係と相互作用を念頭に置く事の必要を主張する。適當に云へば、實は單一なる社會學のみがあるのであつて、經濟學はその一章をなすに過ぎない。

二、經濟學は單に靜的たるのみならず、動的でなければならない。それは一の固定的社會狀態を假說し、單にその共在の法則のみ存するものと想定し、以てその繼起の法則を無視してはならない。社會が發展過程を辿るものであり、然もその過程が規則的のものである事そして如何なる社會的事實も、その歷史から離れては、眞に理解され難い事は、今や遍く認められてゐる。かつて總ての場合に適用され、總ての問題を解決すると信じられたる舊學派得意の「袖珍公式」は、その嘗つて享受した尊敬を失つた。經濟學はその方法に於いて歷史的となつた。社會的進化の各段階は各異る要素を有するものであり、その實踐に於いては變化するを要求するものである事が認められた。

三、經濟學に於ける演繹に屬すべき些少ならざる領域を認むるけれども、然も歸納的研究が優勢なるべきを主張する。抽象的「經濟人」を構成し、その經濟人がそれによつて行動すると想像される二三の原理から、社會の一切の經濟現象を演繹する代りに、吾々は他の實證科學に於ける如く、社會的事實が如何に在るかを確知しなければならぬ。この研究が完成されたる後に於いてのみ、之が源をば、外的世界の構成と人性と、而して當時の社會の環境との裡に辿る事に努むべきである。而して最も價値ある研究手段は「比較」として知らるゝ歸納法の一特種形式である。それは「歷史的由來」の研究に最適なものである。

四、這般の知的運動は情操及道德的調子に於ける新傾向と結合してゐる。嘗つて最も卓起せる精神の所有者の多くを經濟學の研究から却け「陰慘科學」の名を經濟學に冠させたる舊き無情と頑固とは、より人間的な温和な精神に代つた。特にプロレタリアートの問題、勞働階級の狀態と將來の問題は社會の感情と並びに知性を捉へた。そして從前の如何なる時代にも勝る熱心と同情的精神を以て研究されてゐる。（註七六）

註七六　Ingram's Preface to the "Introduction to the Study of Pol. Econ. by R. T. Ely, pp. 4-6.

これ等の言葉の中に、コントの影響を指摘するは極めて容易である。それ等はコントが社會的事實は in the ensemble に研究されなければならないと言つた事の敷延說明に外ならない。イングラムの方法的思想の中核は實にこの一事なのである。その「經濟學史」の日本譯に對する序に於いても「余が最も熱心に貴國の思慮ある人々に力說せんとするは、如何なる部分的綜合も不可能なる事である」（註七七）と言つてゐる。その主著 History of Political Economy は實にかゝる見地に立つて經濟思想發展の跡を示さんとするものである。

註七七　Author's Preface to the Present Tianlation

イングラムに從へば舊經濟學に嫌らざるの風は英國其他に廣く現れ、經濟學の方法及び學說に就いて異論が甚だ多い、實に社會學の一部である經濟學は過渡期に在るけれども、之に代るべき新思想は未だ精緻でない、玆に經濟的現象に關する思想の進步の大體を歷史的に追求し又各時代に從つて追次續出せる諸說を熟考較量し以て吾人が現在の位置を一層明瞭ならしめ且つ將來に於いて更になさんとする進步を容易ならしめんとする事が本書の努むる所であると。

經濟學史と經濟史とは勿論別個の研究ではあるが、然も相互の關係は頗る密接である。經濟學說の興起と結構とは各その時代の實際的位置必要及び傾向に依りて大いに趣を異にする。重大なる社會的變化の起る每に常に新しい經濟問題は發生する。各時代に行はれたる理論が感化力を有したるは、それが當時の緊急問題に解釋を與へたるの觀ある事實に依るのである。又、各思想家はその時代の子である。彼等は、その中に在つて生活し、依つて以て運動するかの社會的媒介物と引離して得られないのである。凡て社會學の種々なる部門は實際的必要上、別個に研究されるべきではあるが、その相互關係は頗る密接であるから、何れの部門の歷史と雖も、合理的には之を個別的に研究し得ない。社會的思索及びその一分科としての經濟研究の哲學的方法及び學說は、發達の順序より言へば社會學に先つべき諸科學、殊に有機的性質の科學の感化を受けるものであると。

かくの如くイングラムは歴史の發展と共に經濟學は進歩するけれども、各進歩は絶對的に舊説を排除するものではない。舊説は實際の經驗を基礎とし、若しくは一種異る社會的秩序の成立を假説せるものであつて往々にして相對的公理を有したのであると言ふ。（註七八）

註七八　J. K. Ingram-ibid. p. 3.

這般の根本思想はその學説史の敍述解明の裡に如何に表現されたか、これ次の問題である。

イングラムは經濟學史を考究するに當り、之を古代、中世及び近代に三大別する。

古代及び中世に於ける經濟學は單に初歩的なものに過ぎなかつた。如何なる社會的學説にしても、顯著なる發展を爲す爲めには二個の條件が滿されなければならない。その一は研究者の觀察に對して適當なる材料を供し、而して科學的概括を爲すに充分なる基礎を與へ得べき程度にまで、現象が現れなければならない事である。その二は觀察者の技能が熟達し、相當の幇助と研究の要具とを供られなければならない事である。詳言すれば經濟學の研究に先ち、これよりは一層單純なる諸科學の攻修起り、以て經濟學説の緊急なる論題を供し、適切良好なる研究方法を用意して置かねばならぬ。社會學は、物理學及び生物學の理論を利用するの要あり。然もそれはその專門家に藉りなければならぬ。又、論理的方面に於いても、社會學が用うる演繹法歸納法比較法なるものは、その以前に、數學研究に於いて及び無機界又は社會よりも複雜ならざる有機體の研究に於いて、早く既に形成されて居らねばならぬ。古代及中世に於いてかくの如き二條件が滿されて居らない事は明白である。從つて、それは當然に幼稚たらざるを得ないと。コントの影響は洵に歴然たるものがある。

イングラムは古代社會を以て、戰爭の爲めに組織せられたりと看る（註七九）　奴隷制度はかゝる古代社會の軍事的組織と必須の關係に在りて、産業蔑視勞働蔑視の思想は實に奴隷制度の産物と考へられる。かくして多數の生産者は知的修練を欠き、內政上の思想、利益、盡力に無關係となり、その結果潑溂たる經濟活動をなすに不適當となつた。更に軍事的慣習より起る身命財産の不安定は大資本の蓄積及び信用制度の設立に重大なる妨碍を與へた。加ふるに知識及社會關係の未發達に依りて、古代の經濟生活は單調に變化なきものとなつた。從つて吾人は古代人の著書に於いて、單に一般の經濟的眞理に關する初歩的又は一端をみるのみである。實に眞正なる經濟學は近代の科學なのであると。（註八〇）

註七九　Ingram-ibid. p. 7.

註八〇　Ingram-ibid. p. 8.

古代に比し、中世をばイングラムは遙に重要視し「後世に至り、歐洲の社會的運動に於いて見る現象中、一としてその萠芽を茲に有しないものは殆んどなかつた」と言ふ。これはカトリック教の深甚なる影響化に在る封建的社會であつた、封建制度は秩序の維持及公共的防禦上不可避のものであつた然も封建制度の社會は經濟生活を著るしく地方化するの結果として、有力なる産業的進歩をこの社會に期待する事は困難である。所謂カトリック經濟學と稱せられるものは、現象の説明に非ずして、行爲の戒律であつた Corpus Juris Canonici は靈性的幸福の見地より生活を觀じ、この世に神

の國を建て之を維持するを目的とした」と（註八一）併し乍ら、天國を來世に約束するキリスト教は、イングラムの言ふ如く神の國を地上に建設せんとするものではない。

註八一　Ingram-ibid. p. 22.

イングラムは第十三世紀末を以て中世の終末と見る。それより始る近世は更に三期に分たれる、第一期は第十四第十五兩世紀である。

この時期は封建制度瓦解の過程と、新制度の原質たる諸要素興起との時代である。國王と領主とは互に反目し、都市の産業的勢力と結托して各、その權力を張らんとした、併しこの運動は同時代に於ける經濟的文獻に反響を及ぼさなかつた。

第二期は第十六世紀の初葉を以て始る。隆起し來れる中央政權は新産業勢力を把握し、一方に於いて人民の發展的熱情を滿足せしむると共に、他方、之に軍資を供せしめて自己の强大に資せんとした。中央集權の致せるこの實際的努力及び之が根柢をなす社會的傾向は、マーカンチリズムと密接なる關係を有する。

第三期は殆んど第十八世紀に該當する。この時期に於いては俗界宗界二つながら全く純然たる新組織の傾向をとつた。この傾向は先づその時代の哲學及一般文學上に現れ、遂に所謂 laisser faire の思想となつた。この近代的運動と共に全體的精神は衰微して、個人主義の教義は利己的行爲を奬勵するの結果となつた。而して經濟學成立の日は侵々呼として近づきつゝあつた。これよりイングラムに依つて記述せらるゝ經濟學史をその大要に於いてさへ、紹介する事は、本論文にとつて不適當である。たゞ單にイングラムが如何なる點に各個の思想の重要性を認めたかを指摘し、以てイングラムの思想傾向を明にすれば充分である。

先づイングラムはデヴイッド・ヒームに依りて經濟學的思索が人性及一般人類史に於ける最大最深の思想と關係を有するに至れる事を明にし、經濟的研究の歴史に於いて、最も重要なるヒームの思想的特質は、ヒュームが社會的政治的生活の凡ゆる重大なる部分と經濟的事實とを關係せしむるの慣行があつた事及び經濟研究に歴史的精神を注入する傾向があつた事であると論斷してゐる。

イングラムはスミスに於いて演繹歸納の兩傾向をみる。前者は自然神學に基くものにしてスミス經濟學の根本をなせるものである。後者はモンテスキューに受けたる所大にして、之に依りて前者より結果すべき極端なる結論を避け得たのである。然も國富論第一及第二編に示さるゝ「原理の公式」化は實に英國舊派の起源たるものである。國富論第三編は雄大なる歴史的精神の最も充分に示されたる一編である。こゝに於いてスミスは歐洲の産業的運動を正確に記述し且つ之を以て充分なる社會的原因より起れるものと説明した。然も他面に於いて、之を以て「事物自然の順序」に背反するものとして排斥した事は、「スミスの哲學を汚染せる」絶對主義の影響を示すものであると主張した。而して國富論は假令例外的名著なりとするも、概して重に形而上學的基礎を以てその究極的根據とする彼の第十八世紀の消極哲學の産物なる事を忘るべからざるものとなした。

最初のスミス批評家中最も有力なるものはベンサムである。所謂ベンサム主義として知らるゝものは、コントの説きし如く「自然的自由」の經濟學より來つたものである。他方に於いて、ベンサム

主義は個人的利益の原理及びこの利益に基ける演繹法を廣く社會的倫理的學説に適用し以て自然的自由主義を盛ならしめたのである。彼は決してミルの言ふ如く、深遠なる思想家には非ざりしも、然も最も慧眼にして論理力を有せるは確實である。且つ漠然とはしてゐたが實驗的社會學の方向に進みつゝあつた。唯彼等は科學的修養を缺けると、彼等の思考法が絶對的なりしとに因つて、この實驗的社會學を建設する事が出來なかつた。

英國經濟學に於ける歸納的歴史的傾向を代表するものと信ぜらるゝトーマス・ロバート・マルサスは、歴史主義者イングラムに依つて尊重せらるゝ事が尠なかつた。何故ならばその歴史的研究は總て After-thought と看做されたが故である。彼の算術級數と幾何級數の比較の如きは「必然誤謬なる事明白なり」と斷定され「マルサス説はその使用する熟語の嶄新なりし程に、その主意に於いて嶄新ならず」と主張された、イリーの傳ふ處に依ればイングラムの主たる興味は經濟學に非ずして宗教、就中、人道主義の宗教であつたといふ。かゝる傾向の人がマルサス説を懌ばざるは當然の事であると主張するならば、そは筆者の獨斷であらうか。イリーも亦「イングラム博士が人道主義の宗教に興味を有せるは、此の經濟學的事業に不幸なる影響を及ぼした」と説いてゐる。（註八二）更にマルサス説の一層苛酷なる形式に於ける思想は「人道主義の感化が、生活事情に於いても、等しく調節力たりとの一層廣汎なる説の爲めに除去せらる」と説ける如きイングラムその人の傾向を如實に示せるものであらう。

註八二　Ingram. History of Pol. Economy. Introdustion p. ix.

「抽象經濟學の眞の創設者」デヴィッド・リカアドオが多くの同情をイングラムに期待し得ざるは當然である。リカアドオは多少專斷的なる假説から出發し、これ等より演繹的に推理し而してその結論をば眞なりと宣言しその想定されたる條件の部分的非現實性を醻酬する事も、將亦、その結果を經驗に照會もしない。契約者たる二人の野蠻人を假定し、彼等が如何に行動すべきやを考察するは彼が得意の論法である。リカアドオは經濟學の適當なる方法を解明しない。恐らくは之を組織的に檢しなかつたであらう。否、その能力が無かつたのであると。リカアドオの「經濟學原理」の中心問題は分配の問題であるが、社會の進歩と共に發生すべき這個分配上の變動こそ、特に彼が研究せんと公言せるものである事は、注意に價する。固より彼の見地よりは、かゝる學説を供與する事は不可能であつたが、然も非歴史的なる一著者が、かくて經濟動學の理論の必要を感知せるは注意に價するとと。

總じて古典學派の理論は「經濟人」の假説、無拘束的自由競爭の假説、取引兩當事者間には契約の平等が存するとの假説、社會には一定の普遍的勞銀率及利潤なるものありとの假説に依りて、少なからずその價値を減殺される。然もこの最後の假説は資本及び勞働の無碍なる流動と、資本家及勞働者が全國産業の與態と前途に就いて充分なる知識を有する事を意味する。然るにリカアドオの有名なる地代説はこれよりも尚一層抽象的のものである。それは移民事業の影響、智力の增進、生産技術の改良、借地法の改正その他の事情を無視してゐる。これ等の諸事情の結果としてリカアドオが豫示せる壓迫は感知されず、叫びは騰貴する物價に對する消費者のそれに非ずして、却つて低落

する地代に對する地主のそれであると。

一般哲學に於けるスミスの學說の基礎が不健全なる爲め、その立論の倫理的性質が害された事は明であるが、然もスミスの研究法は歸納法と演繹法との正しき結合より成れるを以て、そは殆んど非難の余地がない、然るに正統學派の缺點たる一、その概念の抽象性二、演繹法の過重視三、その絕對主義は盡くリカアドオの模範が奬勵を與へたのであると。

ミルも亦イングラムに依りて大いなる尊敬を受けるを得なかつた。彼の見る處を以てすれば、ミルはスミス以後の經濟學の成果を合成せんとすると共に、その時代に於ける一般社會哲學の思想に照して、純然なる經濟現象を示さんと試みた。然も「彼はこの目的の實現に確に失敗した」「その著書はその科學的實質に於いては殆んど、否、寸毫も加ふる處がなかつた」

ミルが社會問題を論じたる廣汎にして哲學的なる精神も、多くコントの影響に因るものである。確にミルは自ら認めたる以上の恩をコントに負ふものである。若し尙一層充分なる感化を受けたりとすれば、或は、ミルは經濟學を先驗的體系より解放し、最も廣義なる觀察の上に、產業生活の眞の學說を樹立したかも知れないが、併し恐らく、時期も未だ之が爲めに熟せず、亦ミルの先天的知的缺點が、かゝる仕事に彼を不適當ならしめたか知れない。何故ならばロッシャーの言つた如く「彼は歷史的頭腦ではなかつた」からであると。

ミル自分は彼の分配論と生產論の論理的性質の差別を重視した、併し之をも亦イングラムは「余りに絕對的な區別はなし難い」ものゝ考へる。結局彼の著書は他の點に加へられたる種々なる變更修正にも拘らず、公明なる利己主義の原理よりリカアドオの學說を演繹する事を續けつゝ他方に於いて全體的活動が同情に基礎を置くべき社會秩序を期待しつゝあつたのであると。

かゝる二元的傾向は方法論中にも見出される、當初に認めたる先驗的方法と、コントに敎示されたる歷史的方法との妥協を見出さんとして、各々が適用さるべき二種の社會研究を認むるに至つた。ミルはその疑念と拒否にも拘らず、方法に關しては尙舊派の一人であつて、決して歷史派たるに到らなかつたのであると。

ジョン・エリオット・ケアンズに至りてはその「經濟學の性質及び論理的方法」が爭ひ難き能力を示せるに拘らず、或點に於いては方法論的退步を表示するものゝ如く、將來に於いては、單に歷史的興味を有し得るに過ぎないものと所定された。

然もイングラムはミル及ケアンスの方法論が、重要なる消極的效果を有せる事を認めた、彼等は舊經濟學をその傳統的地位より下らしめ、普遍に承認されたる見解に二個の修正を加へて、その誇張されたる自負を打破した。その一はリカアドオ流の經濟學が純粹に假說的なる事の曝露であり、その二は經濟學理と技術との判然たる區分之であると。

轉じて歷史學派を論述する前に、イングラムは先づコント社會學說を略述する。

所謂批判哲學は舊封建制度の基礎たる學說を破壞し去つたけれども、依然絕對自由の公式を反復するのみにて、新學說を樹立するの力を有しなかつた。かくて復古的思想と新生活への動向とは同時に現れ、その結果一の混亂的性質を有する動搖を生むだ。第十九世紀をして漠然たるそして過

渡的外見を呈せしめたる這般の動搖より生ずべき唯一の可能的結果は人間の問題に關する意見の漸次的湊合の基礎たるべき科學的社會學說の建設に存した。その建設は世界がオーギュスト・コントに負ふ不朽の功績である。イングラムはコント社會學の主たる特質を次の七個に要約する。曰く一、社會學は一の科學にして、社會狀態の一切の要素を、それ等の關係及相互作用に於いて研究する二、社會學は社會靜學並びに動學を包含する　三、かくてそれは「絕對」を排除し、想像されたる固定性に代うるに秩序ある變化の概念を以てする　四、その主たる方法は、他の方法を排するのではないが、歷史的比較法である　五、それは道德的觀念、自然法よりの系たる個人權に對立するところの社會的義務の觀念に依つて浸透せらる　六、その精神及實際的成果に於いて、それは民衆の大目的を構成する一切の大目的を實現せんとする　七、それはこの目的を達成するに平和的手段を以て革命に代ふるに進化を以てすると。佛國大革命後の社會狀勢を背景としてみる時、コント社會學のイデオロギーは判然と吾人の眼前に浮出する。而してこれに萬腹の信賴を置けるイングラムの思想が歷史派の思想の有力なる一構成分子なるをみる時、英國歷史學派の社會學的意義は著るしく明瞭となる。而してコント社會學に對するイングラムの解說は、實にイングラム自らの方法的思想の最良なる表現である。

イングラムは解說する。コントは實證哲學第四卷に於いて社會學的方法を表明せるが、これに於いて社會靜學と社會動學を大別する。前者は社會的共在の法則を攻究するものにして、種々の社會機關及作用の間には一般的一致が存するの一事を根本的原理とする。後者は社會發達の法則を攻究するものにして、進步は秩序の發達であるとの理由に依つて、必然前者に從屬する。發達の研究には、特に生物學者が用うる比較法を修正せば以て適當なる方法となるであらう。即ち社會の連續的段階を組織的に比較し以て彼等の因果法則を發見し、彼等の特性的要素の關係を決定すべきである。這般の兩研究に際して人性の根本的諸性向を無視し又は之に矛盾する事は許されざるも然もこれ等の性向よりして、直接的觀察とは獨立に、兩種の法則を演繹せん事は不可能である。人間社會の一般的構造も、亦、その發達の進行も、共に、かくの如くしては豫言し得られざるものである。特に動的法則に就いて然りである。何故ならば、社會的推民を生ぜしむる力は過去幾時代の蓄積されたる力であつて、到底演繹的研究を許さゞる迄に複雜なるものである。

かくの如き見地より觀る時、經濟的機關及作用を以て、社會の他部分より切離して研究せんとする事は、準備的に不可避なれども、以てその眞正なる說明とはなり得ない。孤立的經濟學は不可能である。又、個人的人性に關する知識は、如何に有用なる說明を與へ得るにしても、社會の經濟的機構及その發達の狀勢を演繹的に豫知し能はざる以上、唯直接的歷史研究に用つてのみ之を確知得るのである。從來の經濟學の體系は經濟學の主題の全面に關して、部分的斷片的觀念以外の何物でもない。更に、一歷史時代の經濟的構造とその作用は他の時代のそれと異るものなるが故に、吾人は普遍的妥當性を有する絕對的一體系を放棄して、之に代ふるに一聯の體系を以てせねばならぬ。然もその斷起は全然不定的なものに非ずして、それ自身法則に依つて支配されると。

ドイツ歷史學派の方法論に對するイングラムの紹介的敍述は之を省く。イングラムは獨乙歷史學

派の傾向中に、非難すべき二つのものを見出した。その一は所謂世界主義の誤謬と永久主義の誤謬とを同列に置く事であり、その二は經濟的法則の否定である。社會的研究よりみる時、世界主義の誤謬よりも永久主義の誤謬は遙に重要である。何故ならば歴史的發達の段階を無視する事は、一切の研究を根本的に無效ならしむる事だからである。又、第二の點に就いて言へば、社會的構成及び其作用上に於ける凡ての要素が發達をするものである事は彼等自らが力説する處である。然るに發達とは「秩序ある變化」であるが故に、之を法則と稱する事は、些かも矢當でないと。（註八三）

註八三　Ingram-b'd. p. 194

英國歷史學派に關する敍述は、それ自身が本論文の目的なるが故に、一切之を省く事とする。

五

「宗教の爲めに社會改良家となり、社會改良の爲めに經濟學者となれる」（註八四）アーノルド・トインビーも、亦、英國歷史學派に於ける特色多き一人である。その立場はバジョットのそれに著るしく類似する。

註八四　アーノルド・トインビー　英國產業革命史論　芝野十郎譯、第十九頁

「近年リカアドオ及びミルに依つて研究された經濟學の抽象的演繹法に對し、唯一眞實なる經濟學研究法として歴史的研究も樹立せんとする企圖が起つた。クリッフ・レスリーの如き歴史的研究法の主張者は演繹法は根本的に虛僞であると主張する」。けれどもドインビーに依ればかゝる非難は演繹法の機能に對する誤解に依存する。抽象經濟學の法則は文明が或階段を經過し、且つ富の取得が人間の唯一目的たる場合に限りて眞實なる、法則である。かゝる假說的法制は單に不正確たる結論に導くに過ぎないが、而も依つて以て有力にして壓倒的なる傾向の存在を觀察し、指示すべき見地を吾等に與ふるが故に有益である。歴史的方法と演繹的方法とは外觀上背馳するも、とは演繹法の誤用に基くものである。之を用うる者がその假說を精査しその結論を事實に徵して吟味するを忘り、或は絶對的に眞ならざる前提（例へば賃銀基金說の如き）に基く議論等を行ふが故である。併し之は決して演繹法が根本的缺陷を有するを意味するものでない。實に抽象經濟學の立場に關する最良の說明はバジョットの「經濟學研究」中に見出されるのであると。

然るにも拘らず、舊經濟學は烈激なる非難と深大なる不信の的となつてゐる。この原因を何處に求むべきであるか。トインビーは之を個人主義に見出した「個人的自由に對する信仰、產業的制限の無益に對する信仰は舊經濟學者の心裡に樹立され、彼等の中心學說として確認された。併し乍ら彼等が惹起せる猛烈なる反抗の主要原因は正にこの學說であつた。若し吾々が經濟學者に對する最も潑剌たる痛罵を惹起したる原因を徹底的に探究するならば、常に吾々は個人主義に對する非難に復歸する。而して之は當然である。單に金錢的利害に依つてのみ結合される孤立的個人としての人間觀は、本質的に經濟學に遍在する人間觀である。而してこの概念は實踐科學としての其の全關係を決定した。コオルリッヂ、カーライル、フロードは自由放任の學說が國民生活を破壞し、個人的營利に對する國民的福祉の隷從、國家的分裂をさへ導くものであると絶叫した。惟り哲學及び道學者のみならず、政治家も亦かゝる非難に參加した。然るにこの非常なる勢を以て爲された非難は却つて非難

者の敗北に終つた。何故であるか。トインビーは確言する「それは、新しき道德的關係が生起し得る前に、舊き經濟狀態が破壞されねばならぬ事を、彼等が悟らなかつたからである」と。「彼等が保存せんとした道德關係は勞働者の依存に基礎づけられてゐた。然るにその依存が破壞されるまで、新しき生活は決して到達され得ないのであつた。この點に於いては、歴史的研究法は却つて舊派經濟學者に左袒するものである。

一八四六年に至るまでは、經濟界の大問題は制限の撤廢と交易自由の確立であつた。この問題の解決策として演繹法は適切であり必需であつた。併し乍らその時以後に至り、彼等は殘存する困難に對して提示すべき救濟策を有しなかつた。演繹經濟學の提供し得る全部であつた所の制限の撤廢に依つて解決されなかつた勞働問題こそ觀察法を復活せしめたのである。抽象經濟學が放棄せる諸問題の解決を發見せんとする切望は、閑却されたる事實に對して、經濟學者の注意を喚起した。

更に考慮に入れるべきは舊派經濟學の法則概念である。彼等はそれを屢〻引力の法則に喩へて、その不變性を主張した。勞銀率は人が左右し得る諸原因の結果に非ずして、一の自然法則の結果であると信ぜられ、且つしかく勞働者に向つて敎へられた。賃銀基金說は勞働者の團結を無效なりと宣言した。經濟學は勞働階級と衝突した。かくて經濟學は勞働者階級に依つて變化せしめられた。

歴史的研究法は各方面の研究に從ふものである。それは經濟的發展の實因を檢討し、而して一定の經濟制度には政治制度が富の分配に及ぼす影響を考察する。それは又、一定の國に於ける經濟發展の段階を研究するのみならず、之を他の國及び時代に於いて行はれた經濟的發展の段階と比較する。

之に依りて、普遍的に適用さるゝ法則を發見せんと努むるものである。歴史的研究法は、亦、經濟法則と敎訓の相對性を敎ふるものである。歴史的研究法は經濟學を革新した。然もそれは諸法則の虛僞なる事を示す事に依つてゞはなく、それ等の大部分が文明の特殊なる段階に相對的なる事を立證する事に依つてゞあつたと。然もトインビーは決して總ての經濟法則を相對的なりと主張するものでない。收穫遞減法則の如き、不變なる法則の若干存在する事を認容したのであつた。

かくの如き所說は最も公平なる意見と云ふべきであらう。ミルナー卿の所言の如く經濟理論に於いて彼は中間的地位を占めてゐた。その意味に於いて、彼の所說は特色尠きものと言ひ得るであらう。けれどもトインビー經濟學には一つの特色がある。それは高き道德の香りである。

彼は舊經濟學の反對者ではあるが、自由競爭の否認者ではなかつた。否、之を以て破壞し得られないものとみる。そはたゞ統制し得られる力である。競爭それ自身は彼に從へば、本來善惡いづれでもない。そは單に一の手段として利用すべき力たるに過ぎない。然もそれを統制し制禦した時、宗敎と道德との作用がなければ決して最も充實せる生活には到達しない。宗敎と道德とは人類の福祉を獲得するに必要なる條件である。初期經濟學者の關心する生產の增加は、社會的並びに政治的進歩の一手段として、人間に必要であつた。併し舊派經濟學は「分配」の問題に當面して失敗した。今や富のより公平なる分配が要求され、必要とされてゐる。乍然、この目的の爲めには、人生の福音が必要であつて、而も舊派經濟學は毫も之を有しなかつた。今や此の如き福音が唱導されなければならぬ。然らざれば、その仕事は總て失敗に歸するであらう。道德は實踐科學としての經濟學と結

合せられなければならない。（註八五）

註八五　Arnold Toynbee- The Industrial Revolution in England pp. 1-7 及び Ricardo and Old Political Economy 參照

六

吾等がトインビーに見出せるものは勞働階級に對する熱烈なる同情であつた。今やソーロルド・ロージャーズに見出すものは、勞働階級の陰慘なる狀態の觀察より來る所の、舊經濟學に對する憤懣である。

「經濟學に對する不信任は勞働者に依つて高らかに叫ばれた。之は驚くべき事ではない。勞働問題は多數の經濟學者に依つて、腹立しい不避な尊大さを以て論ぜられた。經濟學者達は一切の富が勞働の所産であり、資本は蓄積勞働の成果であり、そは勞働のエネルギーに依つて擴大し、增大されつゝある事を敎へた。然る後、方向を轉じて、勞働者がその數を愚かに增加せる無分別、無鐵砲無制節を怒罵し、以て、若し勞働者が幾千人も去つたならば、吾等の總てがより良き生活を送り得べき事を暗示する、然るに、失はれた方が遙に有益なるべき多數の人々が、安樂な生活を送つてゐる。かくの如き痛ましき光景の歷史的原因を採り、又は何等かの永續的愚行が貧窮の主原因たらざるやを發見せんとする如何なる企てをも經濟學書中に見出した事はない。勞働者が自己の狀態を改善せんとして爲せる諸の企圖は、誹謗され、無視され或は勞銀基金に及ぼすべき影響に關する警戒の題目とされたが。抑〻賃銀基金なるものが錯覺なのだと。（註八六）

註八六　T. E. Thorold Rogers. The Economic Interpretation of History. Preface p. vii.

疑ひもなく、或は樂觀論者となり、或は杞憂家となる事は經濟學者に有利である。甲には勞階階級の數と賃銀に關して詳論し、乙には石炭の消盡を豫言し、丙とは耕作の限界を論じる事は有利である。然るに勞働階級の進步は極端に不滿足であり、之に關して論述せる人々に依つて非常に誇張されてゐる。然るに石炭の消盡や耕作の限界は風聲鶴唳である。事實、之等の經濟學者は概ね裕かな生活をしてゐる人々であり、生活の爲めに喘ぎつゝある人々に高尙な同情しか持つてゐないのだ。最も惡い事には彼等は彼等が絕對に眞なりと公言しつゝある事に關する社會的事實に極く無智である。小麥畠と大麥畠の區別の出來ない者が、耕作の限界を喋々してゐる。（註八七）

註八七　Rogers-ibid. Preface p. xi.

經濟學を不信用ならしめた二原因の一は實にこの事實の傳統的無視である。他の一つは定義で自分の首を絞めてゐる事である。一人が或る物又は考へに定義を與へる、次の者がこれを擴張したり變化する、然もその場合、事實に照合せずして、自己の經驗や印象にのみ賴る、言葉を細かく區別したり、定義を擴張したりする事は最も愉快な仕事である。それには智識は要らない。精密でさへあれば充分である。だが、何よりも經濟學者は實際的でなければならない。（註八八）

註八八　Rogers-ibid. Preface p. viii.

嘗つてロージャーズはその當時權威なりし經濟學の多くが、社會生活の事實には殆んど關係なき言葉の遊戲の集合にすぎない事を疑つた事があつた。偶然と或稀有なる地方的機會とが、彼をして祖先の社會生活の事實、その存在さへも全く疑はれなかつた事實の研究に向はしめた。最初は主と

しては生活必需品の價格の形に於いて、材料を蒐集し初めた。併し直ちに彼はその調査を擴張し、六世紀前よりの、英國人の社會事情を知らしむべき一切のものを、その研究中に抱含せしめた。この研究に依つて彼が知つた事は、通俗經濟學者等が「自然的である」と信じてゐる事の多くが、甚だしく人爲的のものであり、彼等が法則と呼ぶ處のものが餘りにも屢々早急輕卒且つ不正確なる歸納であり、而して彼等が明かに否定し得られないと考へるものが、明かに誤謬である事であつた。「經濟學が邪路に在る事は認められなければならない」のである。（註八九）

註八九　Rogers-ibid. Preface. pp. vi-vii.

"The Industrial and Commercial History of England" Six Centuries of Work "and Wages," "History of Agriculture and Prices in England" 等に於ける歷史的研究はやがて彼をして The Economic Interpretation of History 1891. に於ける歷史觀に到達せしめた。

「殆んど總ての歷史と殆んど總ての經濟學に於いて、經濟的事實の蒐集と解釋とは習慣的に等閑視された。」かくの如き等閑視は歷史をして不精確少くとも不完全ならしめ、經濟學をして單なる頭腦的努力、恐らくは誤れる幻想たらしめる。現在の產業的諸力又は諸要因を知らんとして、之等の力を創造し或は變化せしめたる諸事情を考慮せざる經濟學者は、奇蹟に依るの外はその推理を甚だしく誤るであらう。實證の蒐集を蔑視する時經濟學は生硬なる形而上學となる。固より總ての歷史學は歷史的重要事に注意を向けてゐるけれども、彼等は何等かの經濟的事實が、這個の歷史的重要事に有力なる影響を及ぼせりや否やを、發見せんと企てなかつた。然るに頗る屢々政治的大事件及び社會的大運動の原因は經濟的であつた」（註九一）「歷史の經濟的解釋」はかゝる根本的見解を歷史の裡に示さんとする企である。この歷史に於ける經濟の重要性の認識は、一八六九年即ち二十二年前に出版されたる「歷史的拾遺」の中に、既に現れてゐる。人が自己の生活せる時代に就いて、正しき評價を爲し得る事は頗る稀有であるが、たとへ不完全にもせよ、かゝる詳價に達し得る唯一の手段は社會をその經濟的方面から研究する事に依つて得られるのであると。（註九〇）洵に歷史の哲學と事實とを經濟學に結合し、以て社會生活への洞察を取得せずんば、經濟學を有益に研究する事は不可能である。その下に富が生產せらるべき原因と狀態とを論ずる經濟學の一部は最高の意味に於いて科學的であり、而して事實の說明を離れては、たとへ研究し得られるとしても充分でない。（註九一）正しく解釋せられたる經濟學とは、總ての社會狀態の解釋であると。（註九二）

註九〇　Rogers-The Economic Interpretation of History pp. 1-2.

註九一　Roger-Historical Gleanings 1869. Preface. p. vii.

註九二　Rogers-Historical Gleanings, p. 157.

註九三　Rogers-The Economic Interpretation. Preface. p. xii.

以上に於ける引用句中、註第九十二と註第九十三とを比較せよ、經濟生活と歷史との關聯を說く事は兩者等しいが、後者に於いては、經濟學研究の爲めに、社會生活を結合するの有利が主張されてゐる。然るに前者に於いては、社會生活研究の爲めに經濟的事實を基本とすべき事が說かれてゐる、二十二年の歲月は、ロージャーズをして社會生活中に於ける經濟生活の重要性を益々感銘せし

めたのである。舊經濟學は經濟生活を經濟的動機より説明せんとした。新經濟學は經濟生活に及ぼす他方面の生活の影響を力説する事に依つて、社會生活中に於ける經濟生活の意義を輕からしめた。今やロージャーズはかゝる見地より出發して、却つて再び經濟生活の社會的意義を高唱するに至つたのである。

經濟史研究序説の一章

高村象平

一

「人類の經濟は、測るべからざる長い間に、みすぼらしい單純な起源から欲望充足の益々高度の形態へ進歩して來た。この長い發展過程に於いて、一經濟形態は絶えず内的必然性を以て他の經濟過程から生れ出たのであり、從てこの多様の遺物と萠芽とから一層の發達を遂げたのであるから、經濟發展は、從來の全過程に於いて、連結せる因果關係的の一の連續過程であり、又先行せる形成物と關聯して絶えず新しい形體が出現する一の生成である。」

これは嘗てベルリン大學教授たりしハインリッヒ・クノオが、その浩翰なる著述 Allgemeine Wirtschaftsgeschichte. 4 Bde. の冒頭にものせる言葉である。この書、殊に「自然民族及び半文化民族の經濟」と題せるその第一卷は、故福田德三博士によつて、「其は、經濟史に適當に屬するよりも、むしろ民俗誌に屬すべき自然民族、未開民族の經濟狀態の記述を以つて充されてゐるに止まる」（唯物史觀經濟史出立點の再吟味、前册、昭和三年、四五頁）と評されてゐるものではあるけれど、私は今茲で博士の批評に立ち入らうとはしない。即ちタスマニア人、オオストラリア人、ブッシュマン、ボオトクウデン、インディアン、イロケエゼン、メラネシア人、ポリネシア人、マオリ人、ミクロ